

# 爆弾太平記

夢野久作

青空文庫



……ああ……酔うた酔うた。

……どうだ齋木……モ一つ行こう。脊髄癆ぐらい酒を飲めば癒るよ。ちよつとも酔わんじやないか君は……。

ナニ……恐ろしい暴風雨だ？……。

ウン。近来珍らしい二百二十日だよ。夜半過ぎたら風速四十米突を越すかも知れん。

……おまけにここは朝鮮最南端の絶影島だ。玄海灘と釜山の港内を七分三分に見下ろした巖角の上の一軒家と来ているんだからね。一層風当りがヒドイ訳だよ。……世界の涯に来たような気がする……ハハハ。しかしこの家なら大丈夫だよ。その覚悟で建てた赤煉瓦の温突式だからね。懼りながら酒樽と米だけは、ちゃんとストックして在るんだ。十日や十五日シケ続けたつて驚かないよ。ハハハ……。

イヤ。よく来てくれた。吾輩の竹馬の友といったら、今では君一人なんだからね。もう一人居た福岡県知事の佐々木が、ツイこの間死んでしまったからね……ウン。太っ腹ない男だったが、可愛相な事をしたよ。何でも視察旅行の途中で、自動車もろ共、谷へ落ちたというんだが、人間、何で死ぬか知れたもんじやないね。……しかも、その跡に残った

タツタ一人の君が二十年振りに、貴重な静養休暇を利用して、この天涯の素浪人、轟雷とどろぎ雄なるおの隠れ家を叩きに来ようとは思わなかったよ。

イヤ……実に意外だった。君の顔を見た瞬間に、故郷の禿山はげやまが彷彿ほうふつとして眼前に浮んだね。イヤ。禿はげているから云うんじゃない……アハハハ。今夜はこの風を着さかに飲み明かそうじゃないか。お互いに「頭禿はげてもお酒は止まぬ」組だったじゃないか。ハツハツハツ。風が凪ないだら一つ東萊温泉とうらいへ案内しよう。あすこでモウ一度俗腸ぞくちようを洗つて、大いに天下国家を……。

ナニ……吾輩が首になつた原因を話せと云うのか……。  
ハハハハ。それあ話しても宜ええ。吾輩としては俯仰ふぎよう天地に愧はじない事件で首を飛ばされたんだから、イクラ話しても構かまわんには構かまわんが、しかしだ。君はホントウに吾輩の云う事を事実と信じて聞いてくれるかね。エエ……?……。

イヤ。失敬失敬。それはわかつとる。重々わかつとる。君が吾輩を信じてくれる事はトコトンまで疑わんが、しかしそれでも吾輩の休職の裏面に潜む事件の真相なるものが、到底、常識では信ぜられんくらい悽愴せいそう、惨憺さんたん、醜怪、非道を極めたものがあるから、特に念を押す訳だよ。

手早い話が、吾輩の首をフツ飛ばした事件の真相を突込んで行くと一つのスバラシイ復讐事件にブツカツて来るんだ。しかもその事件の主人公というのは、吹けば飛ぶような貧乏老爺おやじに過ぎないのに、その相手というと南朝鮮各道の検事、判事、警察署長、その他の有力者六十余名というのだから容易じゃないだろう。……のみならず、その復讐事件の真相なるものをモウ一つ奥の方へ手繰たぐつて行くと、現在、内地朝鮮の官界、政界、実業界に根強い勢力を張り廻わしている巨頭株の首を珠数じゆず繋ぎにしなければならぬという、日本空前の大疑獄が持ち上つて来る事、請合いだ。……しかもソイツが又、全国の爆薬取締ちようさくりに関する重大秘密から、社会主義者、不逞鮮人の策動に引つかかつて行く。もしくは張作霖だんきすい、段祺瑞だんきすいを中心とする満洲、支那政局の根本動力にまで影響するかも知れんという……実に売国奴以上に戦慄すべき彼等、巨頭株連中の非国家的行為が、真正面から蜂の巣を突つついたように、曝露ばくろして来るかも知れないんだが……それでも構わんか……君は……

もちろんこれは吾輩一流の酔った紛れの大風呂敷じゃないんだぜ。相手が普通の人間なら兎も角だ。農商務大臣と製鉄所長官の首を一度に絞めて、前内閣を引っくり返した堅田かただ検事総長から、懐ふところ刀がたなと頼まれてゐる斎木検事正のお耳に、この話が這入はいつたとなる

と問題だろう。メツタにお聞き棄てにならん事を、知って知り抜いて饒舌りよるのじやが宜えか。

アツハツハツハツハツ。イヤ。決してオベツカじゃないよ。持ち上げよるでも何でもない。シラ真剣の打明け話だ。……フウン。多分ソクナ事じやろうと思うてワザワザ訪ねて来た……ウンウン。流石は商売人だけある。アハハハ。イヤ。馬鹿にしとる訳じゃない。そんなら尚の事、話し甲斐があるんだ。……実は吾輩もこの問題に就いては千秋の遺恨を含んでいるんだからね。今云つた朝野の巨頭連は、馬鹿正直な吾輩一人を蹴落して、自分等の不正事実を蔽い隠そうと試みているのだ。吾輩の事業の隠れたる後援者であつた山内正俊閣下が、去年の十一月に物故されて以来、吾輩が木から落ちた猿同然、手も足も出なくなつている事を、彼奴等はチャンと知つていやがるんだ。彼奴等の肉を裂き、骨をしやぶつても飽き足りない思いを抱きながら吾輩は、この釜山港口、絶影島の一角に隠れて、自分の食う魚を釣つていたんだ。

ナニ……何だつて。君の今度の旅行は、そのための秘密調査が目的だ……？ 温泉巡りとは真赤な偽り……脊髄カリエスの静養休暇は検事総長と打合わせた芝居に過ぎん……？ ……エエツ……何という。ホントウかいそれあ。へエ——ツ……。

こいつは一番、驚いたね。いくら何でも、チイツト炯けいがん眼過ぎやせんか……それは……。何を隠そう吾輩は現在、この事件に関する詳細な報告書をあの机の上に書きかけとるんだ。しかしこれほどの怪事件はチョイトほかに類例が無いし、問題が又ドエラク大きいもんだから、あの報告書が出来上つても、どこへ出したら宜ええかチョット見当が附かんで困つておつたところだが……まさかソコを探知して受取りに来たんじゃあるまいな……君は……。

フウン。そうだろう。そこまでは知らなかつた筈だ。

……フウン……しかし奇怪な投書が検事総長の処へ来ている……ヘエ。どんな投書だ……。

何だ。持つて来ているのか。ドレドレ見せ給え……。

……ヤツ……これは血書じゃないか。しかも立派な美濃紙が十枚以上在る。大変な努力だぞ。これは……投函局が佐賀県の呼よぶこ子か……おかしいな。あすこにも吾輩の乾こかん児が居るには居るが……大正九年八月十五日……憂国の一青年より……堅田検事総長閣下……フーム。無論、吾輩が書いたんじゃないよ。書体を見ればわかる。……ウーム……と……。

「私ハ貴官ノ正シイ御心ヲ信ジテコノ手紙ヲ書キマス。」

水産翁、轟雷雄先生ガ免職ニナリマシタ裡面ニハ、国家ノタメニナラヌ重大秘密ガアリマス。大正八年十月十四日ノ午後一時カラ二時ノ間ニ、××デ警察署長ガ三人ト、判事ヤ検事ガ四人ト、松島見番けんぱんノ芸妓げいしや二名ガ殺サレタ事件ノ原因ヲ調べテ下サイ。貴官ノホカニ、コノ真相ヲ調べ切ル人ハアリマセン。

貴官ガコノ事件ヲ、本氣デ調査サレタ事ガワカリマシタラ私ガ貴官ノ御宅ニ出頭シテ、真相ヲオ話しシマス。何トナレバ右ノ九人ノ人間ガ死ンダ事件ノ裏面ニ潜ム恐ロシイ爆弾売買ノ真相ヲオ話し出来ルモノハ、私一人シカ居リマセンカラ。

モシ貴官ガ今年一パイ、コノ問題ヲ調べズニ打ち棄テテオカレタナラバ、貴官モ爆弾売リノ仲間ト認メマス。ソウシテ私ハ別ノ手段デ、モットモット皆サンニ、思イ知ラセマス。ドウゾドウゾ国家ノタメニ御調べヲ願イマス」

ウーム。検事総長を威嚇した訳だな。

……成る程……この投書は二十歳内外の不規則な学問をした青年が、字引引き引き一生懸命に書いたものらしいという見込だね。ウム。「芸妓」とか「爆弾」とかいう難しい文字が特に、活字の通りに正しく書いてあるので推定した……成る程なあ。感心なもんだな。ウーム……それからタツタ一語だけ使つてある「調べ切る」という言葉が「調べ得る」と



いう意味で使った九州北部の方言であるところから察すると、この青年は国家問題に昂奮し易い福岡県下の出身かも知れぬと云うんだね。……賛成だ。吾輩もろて双手を挙げて賛成するね。お互いに福岡生れだから、こうした青年の気持ちがよくわかるんだよ。とにかく生命いのちがけのスゴイ奴に違いない。そこでこの投書を信用して、君が出張して来たという訳か、吾輩の心当りを探るべく……。

何……まだ話がある……。ハハア……書いた奴の詮索は後廻しか。事実の有無が何より先に問題だと云うんだね。如何にも如何にも……そこで朝鮮総督府へ公文書で問合わせた。成る程……そういつた司法官や芸妓が同月、同日の殆んど同時刻に死傷する程の事件ならば、総督府でも知らない筈はないからな。面白い面白い……そうしたらドンナ回答が来た……。十二……。

「管轄違いだ。返答の限りに非あらず」

と開放して来た。怪けしからんじやないか。……回答した奴は何者だ。フウン。わからんというのか。ただ総督府の太鼓判がベツタリと捺おしてあるだけだ。……いよいよもっ以て怪しからんじやないか。

ハハア。その手が例の「朝鮮モンロー主義」だというのか。ハッハッ。「朝鮮モンロー

主義」はよかつたね。……フーン……朝鮮の奴等はそんなに威張るのかなあ。燈台下暗し  
で知らなかつた。……フーン……内地の官庁から朝鮮に這入つて来たものは、いつもこの  
式で、書類でも人間でもピンピン撥ね付ける。事務上の連絡が全く取れないが、総督府が  
独立した官制になつているのだからドウにも手のつけようがない……ヘエー……そうかな  
あ。……吾輩なんかは絶対にソソナ方針じゃなかつたよ。内地から来たものは特に優遇す  
る方針だつたから、チツトモ気が付かなかつたがね……だから首になつたんだ……成る程。  
そうかも知れん。ハツハツハツ……。

それあ君等としちや癢しやくさわに触つたろう。特に司法関係の仕事は内ない鮮せんに跨またがつた問題が多い  
んだからね。一々その手で撥ねられちやあ遣り切れないだろうよ。成る程。……債券や紙  
幣の偽造が、朝鮮に逃げ込むと捕まらなくなるのはそのためだ。遺恨骨髓に徹している……  
……成る程。それあそうだろう。

そこでこつちもグ——ツと来たから、

「内地に於ける銃砲火薬類取締上、調査の必要あり。至急回答ありたし」

と当てズツポーで威おどかしてやつたら、今度は方向を違えた釜山警察署から報告が来た。

……ハハア……総督府の奴、物騒と見て取つて責任を回避しおつたな。卑怯な奴だ。……

その報告書がコレか……成る程。総督府宛の内容のものを、そのままコピーにして送って来た訳だな。ウンウン。朱線を引いた処が要点か。

「……如何なる方面より風聞せられしものなるや判明せざれど、右類似の事件は当署管内に於て確かに発生せし事有<sup>これあり</sup>之……」

……いかにも、コイツは多少名文らしいね。チョイト絡んで来たところが気に入ったよ。

「去る大正八年十月十四日、午後一時頃、釜山公会堂に於て、轟総督府技師の「爆弾漁業」に関する講演中、同技師が見本として提出したる二個の漁業用爆弾が過つて炸裂し、傍聴者たりし判検事、署長等（氏名を略す）七名の死者を出したる事件あり。（芸妓<sup>げいしや</sup>二名の死傷は訛伝<sup>かてん</sup>也）……」

プツ……馬鹿な。朝鮮官吏の低能と来たら底が知れない。コンナ事でお茶が濁せたらお慰みだ。警察の発表なら誰でも信用すると思つているんだから恐ろしい。そこで……と……

「……右は前記轟技師の不注意より起りしものなりしと同時に、当局の威信に関する事故なりしを以て、秘密裡に善後の処置<sup>な</sup>を為し、轟技師の休職を以て万事の落着を見たり。……右御回答申上候」

アツハツハツハツハツ。イヤ巧たくんだり拵こしらえたり。インチキ、ペテン、ヨタも亦また、甚しい。朝鮮官吏の腐敗墮落が、ここまで甚しかろうとは……ナニ。そんな事情もアラカク察していた。なるほど……総督府が、釜山署と慣れ合いで事実を隠蔽すると同時に、責任を回避しているものと睨にらんだ……従つてこの事件は、総督府にもコタエル程度の重大事件だつたに相違ない……その通りその通り。命中率まきせ、正まきに百二十パーセントだよ。朝鮮モンロ―主義をギューといわせる事この一挙に在りか。ハハハハ。愉快愉快。そう来なくちゃ面白くない。

そこで直ぐに君の部下を釜山に密行させた。ウムウム。その部下が釜山に着くと、何よりも先に松島遊廓あぐに上つて散財した。ハハハハ。ナカナカ洒落しやれとるじゃないか……成る程。それからその翌あぐる日、帰りしなに、コツソリ公会堂に立寄つて、内部の様子を一眼見ると、その朝の連絡船で東京に引返して、釜山署の報告はインチキに相違なしという復命をした……ヘエツ……こいつは驚いた。どうしてわかつたんだ。タツタそれだけの仕事で……ハハア。その男の調査によると松島見番けんぼんで二人の芸妓げいしやが変死したのは事実だつた……正にその通りだ。それを警察が強制して失踪届を出させている。葬式も法事も許さない。芸妓屋おきやと親元は泣きの涙で怨んでいるが、泣く児こと地頭じとうに勝たれない。ソレツキリの千秋

楽になっている……ソイツも正にその通りだ。……のみならず問題の公会堂を覗いてみると建った時のまんま修理した形跡が無い。十人近くの間人が爆死する位なら建物の損害が出ない筈はなからう……というのか。

……ウム。エライツ……。

豪えらいもんだなあ。そんなにも頭が違ちがうものかなあ内地の役人は……そこで検事総長と打合せた結果、極秘密裡ごくひつに君が遣つかつて来て、直接、吾輩の口から真相を聴く段取りになつた……ウムツ。有難ありがたいっ。痛快だつ。イヤ多謝コウマブツ……多謝コウマブツ……とりあえず一杯献いう。

君の着眼は正に金きん的てきだつたよ。

朝鮮モンロー主義……売国巨頭株の一扫……手に唾つよして俟まちつべしだ。とりあえず前まえ祝いに大たい白はくを挙あげるんだ。

ナニ……その売国巨頭株の姓名を具体的に云いつてくれ……よし云おう。ビックリするな。貴族院議員、正四位、勲三等、子爵、赤あか沢ざわ事こと嗣つぐ……これが金毛九尾の古狐で、今度の事件の一番奥から糸を操さつている黒頭巾くろずきんだ。君等がよく取逃とどがす吞どん舟しゅうの魚うおという

奴だ。……ハツハツ知らなかつたろう。彼奴の若い時は例の郡司大尉の隠れたる後援者で、東洋切つての漁業通だという事を、誰にも感付かせないように、極力警戒しているんだからね。北洋工船、黒潮漁業の両会社は彼奴の臍繰り金で動いていると云つていい位だ。……その次が現在大阪で底曳大尽と謳われている荒巻珍蔵……発動機船底曳網の総元締だ。知っているだろう。それから京城の鶏林朝報社長、林逞策。あれで巨万の富豪なんだよ。代議士恋塚佐六郎……三保の松原に宏大な別荘を構えている……アレだ。お次は大連の貿易商で満鉄の大株主股旅由高。それから最後の大物が、現民友会の幹事長、兼、弗箱と呼ばれている釜松秀五郎、通信次官、雲田融……と……まあザツトこれ位にしておこう。どうだい。驚いたか。

こいつ等の仕事の正体かね。無論、話すとも。話さなくてどうするもんか。君は吾輩唯一の竹馬の友だ。廢物同様の吾輩の話が、君等の仕事の参考になるのは、吾輩の無上の光榮とし、且つ欣快とするところだ。況んや君の手によつて、極度の乱脈に陥っている現下の銃砲火薬取締が廓清されると同時に、今云つた連中にこの遺恨を報ずる事が出来たとすれば、吾輩の本懐、何をかこれに加えんだ。吾輩の一身なんかドウなつたつて構わない。ウンウン。実にお詔向きのところに来てくれたよ。注文したつて無い大暴風雨に取

巻かれた一軒屋だ。聴いている者は飯爨めしたきの林りんだけだ。ウン。あの若い朝鮮人だよ。彼奴あいつなら聴いても差支えないどころか、吾輩の話のタツタ一人の証人なんだ。吾輩が死んでも、彼奴あいつの報告を聞けば一目瞭然なんだ。年は若い、生なまやさしい奴じゃないんだよ彼奴あいつは……追おい々おいわかるがね……ウン。

ところでドウダイ。モウーパイ……ウン話すから飲め。脊髓カリエス癆ななんてヨタを飛ばした罰ばちだ。落ち付いてくれなくちや話が出来ん。

「酒を酌んで君に与う君自ら寛ゆるうせよ

人情の翻はん覆ぶく波瀾はらんに似たり」

だろう……お得意の詩吟はどうしたい。ハハハハ。お互いに水産講習所時代は面白かつたナア……。

ウン面白かつた。

しかし君は途中で法律畑へ転じたもんだから、吾輩がタツタ一人、頑張つて水産界へ深入りした。……少々脱線するようだがここから話さないと筋道が通らないからね……しかも内地の近海漁業は二千五百年來発達し過ぎる位発達して、極度の人口過剰に陥っている。残っている仕事はお互い同志の漁場の争奪以外に無いというのが、維新後の水産界の状態

だった。

然しかるにこれに反して朝鮮はどうだ。南鮮沿海の到る処が処女漁場で取巻かれてるじゃないか。況んや露領沿海えんかいしゅう州しゅうに於てをやだ。……これに進出しないでドウなるものか。

日本内地三千万の人口過剩を如何いかんせん……というのが吾輩の在学当時から持論だったが

……ウン。君も散々さんざん聞かされた……そこで卒業と同時に、火の玉のようになって日本を

飛び出して朝鮮に渡ったのが、ちょうど水産調査所官制が公布された明治二十六年の春だ

つたが、その時の吾輩の資本というのが、牛乳配達をして貯蓄した十二円ながしと、千せ

金丹んきんたん二百枚の油紙包みと来ているんだから、正に押川おしかわしゅんろう春浪の冒険小説だろう。

……ウン……そこでモウ一つ脱線するが、その頃の朝鮮人が千金丹を珍重する事といっ

たら非常なものだった。君は千金丹を記憶しているだろう。甘草かんぞうに、肉桂粉にくけいふんに薄荷はつかと

いったようなものを二寸四方位の板に練り固めて、縦横十文字に切り型を入れて金粉や銀

粉がタタキ付けてある。無害無効の清涼剤だが、その一枚を三十か四十かに割った三角の

一片を出せば、かなりの富豪が三拝九拝して一晚泊めてくれる。一枚の三分の一でも呉れ

ようもんなら、その頃の郡守といって、県知事以上の権威を持った大名役人が、逆立ちを

しながら沿岸を案内してくれるというのだから、まるでお伽とぎばなし話わだろう。おまけに吾輩



は内地の騎兵軍曹の古服を着て、山高帽に長靴、赤毛布ゲットに仕込杖しこみつえ……笑つちやいけない。ちやうどその頃、先輩の玄洋社連が、大院君を遣付やつつけるべく、烏帽子直垂えぼしひたたれで驢馬ろばに乗つて、京城に乗込んでいるんだぜ。……その吾輩が長髯ちやうぜんを扱しじきながら名刺を突き出すと、ハガキ位の金縁を取った厚紙に……日本帝国政府視察官、医典博士、勲三等、轟チヨツデヨソウ雷ライ雄ウソ……と一号活字で印刷してある。意識すると豪胆、勇壮、この上なしの偉人という名前なんだから、大抵の奴が眼を眩まわしたね。最小限華族ヤソパンぐらいには、到る処で買冠かいかぶられたもんだ。

この勢いで北は凶満江とまんこうの鮭から、南は対州つしまの鰯ぶりに到るまで、透きとおるように調べ上げる事十年間……今度は内地に帰つて、水産講習所長の紹介状を一本、大上段に振り冠かぶりながら、沿海の各県庁、水産試験場、著名の漁場漁港を巡廻し、三寸不爛ふらんの舌頭ぜつとうを以て朝鮮出漁を絶叫する事、又、十二年間……折しもあれ日韓合併の事成るや、大河の決するが如き勢をもつて朝鮮に移住する漁民りようみんだけが、前後を通じて五十万という盛況を見つこんにちつ今日に及んだ。歴代の統監、総督の中でも山内正俊大将閣下は、特に吾輩の功績を認め、一躍、総督府の技師に抜擢ばつてきし、大佐相当官の礼遇を賜う事になった。苟いやしくも事、朝鮮の産業に関する限り、米原物産伯爵、浦上水産翁いえじと雖も、一応は必ず、吾輩、轟技

師に伺いを立てなければ、物を云う事が出来ないという……吾輩の得意想うべしだったね。ところでここまではよかった。ここまではトントン拍子に事が運んだが、これから先が大変な事になった。引くに引かれぬ鞆当てから、日本全国を潜行する無量無辺の不正ダイナマイトを正面に廻わして、アアリヤジャンジャンと斬結ぶ事になった。しかもソイツが結局、吾輩タツタ一人の死物狂いの白熱戦になって来たんだから遣り切れない。

或は吾輩一流の野性が崇つたのかも知れないがね。

そのソモソモの犷れ初めというのは、実につまらないキツカケからだった。

今も云う通り吾輩は、総督府のお役人になってしまった。一介の漁師としては正に位、人臣を極めるところまで舞い上つて来た訳だが、サテ、そうなつてみるとドウモ調子が面白くない。朝鮮緘しの金モール燦然たる飴売り服や、四角八面のフロックコートを一着に及んで、左様然らばの勲何等風を吹かせるのが、どう考えても吾輩の性に合わなかったんだね。正直正銘のところ山内閣下から轟……轟と云うて可愛がらるよりも、五十万の荒くれ漁夫どもから「おやじおやじ」と呼び付けられる方が、ドレ位嬉しいかわからない。この心境は知る人ぞ知るだ。トウトウ思い切つてこうした心事を、山内さんの前で露骨に白状したら、山内さんあのビリケン頭に汗を掻いて大笑したよ。……あんなに笑った

のを見た事が無いと、同席の藁塚産業課長が云つておつたがね。

その結果、現官のままの吾輩を中心にして東洋水産組合というものが認可されて本拠を釜山の魚市場に近い岩角の上に置いた。費用は五十万の漁民から一戸当り毎年二十錢ずつ、各道の官庁から切つてもらつて、半官半民的に漁民の指導保護、福利増進に資すると同時に北は露領沿海州から、西は大連沖、支那海まで進出して宜しいという鼻息を、総督から内々で吹き込まれた……というと実に素晴らしい、堂々たる事業に相違ない。吾輩の生命の棄て処が出来たといふので、躍り上つて喜んだものだが、サテ実際に仕事を初めてみると、何より先に驚ろかされたのは組合費が集まらない事だった。

アタジケナイ話だが、一年の一戸当りがタツタ二十錢とはいふものの、税金と違つて罰則が無い。おまけに遣りつ放しの海上生活者が相手なんだから徴収困難は最初から覚悟していたが、半分以下に見て七千円の予算が、その又半分も覚束ない。吾輩の本俸手当を全部タタキ込んで建物の家賃と、タツタ一人の事務員の月給と、小使の給料に足りないのだから屁古垂れたよ……実際……。

ところが一方に吾輩が総督府を飛出して、水産組合を作つたという評判は、忽ちの中に全鮮へ伝わつたらしいんだね。到る処から「おやじおやじ」の引張り風だ。……行つてみ

ると漁場の争奪、漁師の喧嘩、発動機船底そこひき曳網の横暴取締り、魚市場の揉め事、税金の陳情なぞ、あらん限りのイザコザを持ち掛けて来る上に、序ついでだからというので子供の名附親から、嫁取り、婿取りの相談、養子の橋渡し、船の命名進水式、金比羅様、恵比須様の御勧請ごかんじように到るまで、押すな押すなで殺到して来る。その忙しい事といったらお話にならない。

しかし吾輩は嬉しかった。何をいうにも内地から遥々はるばるの海上を吾輩が自身に水先案内パイロテージして、それぞれの漁場に居付かせてやった、吾兒わがこ同然の荒くれ漁師どもだ。その可愛さといったら何ともいえない。経費なんかはどうでもなれという気になって、東奔西走しているうちに妙なものだね。到る処の漁村の背後に青々せいせい、渺びようぼう茫ぼうたる水田が拡がって行つた。同時に漁獲がメキメキと増加して、総督府の統計に上る鯖さばだけでも、年額七百万円を超過するという勢いだ。その又一方に組合費の納入成績はグングン下落して、何とも云いもしないのに、タツタ一人の事務員が尻に帆をかけるという奇現象を呈する事になったが、それでも吾輩喜んだね。鮮海漁業の充実期して待つべし……更に金鞭きんべんを挙げて沿海州に向うべし……というので大白を挙げて万歳を三唱しているところへ、思いもかけないドエライ騒動が持ち上つて来た。ウツカリすると折角せつかく、根を張りかけた鮮海の漁業をドン底

までタタキ付けられるかも知れない。大暴風おおあらしが北九州の一角から吹き初めたもんだ。

……というのほかでもない。海上の大秘密……爆弾漁業の横行だった。

ところで又一つ脱線するが、ここいらで所謂いわゆる、漁業界の魔王、爆弾漁業の正体と、その横行の真原因を明らかにしておかないと困るのだ。世間に知られていない……永いこと官憲の手によつて暗やみから暗やみに葬られて来た事実だが、実は今夜の話の興味の全部を裏書する重大問題だからね。

何だ……大いに遣つてくれ。非常に参考になる……ウン遣るよ。徹底的にやるよ。君なんか無論初耳だろうが、実に戦慄すべき国家問題だからね。

由来海上の仕事には神秘とか、秘密とかいう奴が、滅法めつぼう矢鱈やたらに多いものだが、その中でもこの爆弾漁業という奴は、超特級のスゴモノなんだ。

何故かというと一般社会ではこの爆弾漁業横行の原因を、利益が大きいから……とか何とかという単純な、唯物的な理由でもつてアツサリ片づけているようだが、永年、漁夫りようしの中を転がりまわつて、半風子しらみを分け合つた吾輩の眼から見ると、その奥にモウ一つ深い心理的な理由があるのだ。すなわち一言にして蔽おほうと、この爆弾漁業なるものこそ、吾が日本日本の国民性に最も適合した漁業法……怪けしからんと云つたつて事実なんだから仕方がない。

イザ戦争となると直ぐに肉弾をブツ付ける。海では水雷艇の突撃戦に血を湧かしたがる。油断すると爆薬を積んだ飛行機を敵艦にブツ付けようかという、万事、極端まで行かなければ虫が納まらないのを、大和魂やまとだましの精髓と心得ている日本人だ。……最初は九州の炭坑地方の河川で、慰み半分に工業用ダイナマイトを使って極く内々で遣っていた奴が、こいつは面白いというので玄海洋なだに乗り出すと、見る見る非常な勢いで氾濫し始めた。

君等は気が付かなかつたかも知れんが、明治四十年前後まで、関西の市場に大勢力を占めていた対州鰯たいしゅうぶりという奴が在った。魚市場せりばへ行ってみると、黒い背甲せこうを擦剥すりむいて赤身を露だした奴がズラリと並んで飛ぶように売れて行ったものだが、これは春先から対州の沿岸を洗い初める暖流に乗って来た鰯の大群が、沿岸一面に盛り上る程、押合いヘシ合いたたために出来たコスリ傷だ。いわば対州鰯の一つの特徴になっていたくらい盛んなものだった。

ところが、それほど盛大を極めていた鰯の周遊が、爆弾漁業の進出以来、五六年の中うちに絶滅してしまった。勿論、対州の官憲が、在住漁民と協力して極力取締を励行したものが、何をいうにも相手が爆弾を持っている連中だから厄介だ。間誤まごまご間誤すると鰯の代りに、こつちの胴体が飛ばされてしまう。殉職した警官や、藻屑もくずになった漁民りょうみんが何人あるか

わからない……といった状態で、アレヨアレヨといううちに、対州鯨をアトカタもなくタキ付けた連中が、今度は鋒先を転じて南鮮沿海の鯖を逐いまわし始めた。

彼奴等きやつが乗っている船は、どれもこれも申合わせたように一丈かそらの木ツ葉船ぼふねだ。

一挺の櫓と一枚か二枚の継ぎ矧つほぎ帆ほで、自由自在に三十六灘なだを突破しながら、「絶海遙か  
にめぐる赤間関」と来る。そこで眼ざす鯖の群れが青海原に見えて来ると、一人は艫ともにま  
わつて潮錆しおさびの付いた一挺櫓を押す。一人は手製の爆弾と巻線香を持って舳先へさきに立ち上  
るのだ。このバッテリーの呼吸がうまく合わないと、生命いのちがけのフラインプレイが出来ない  
のだ。

手製の爆弾というのは何でもない。炭坑夫が使うダイナマイト……俗にハツパという奴  
だ。ピンツケみたいにネバネバした奴を二三本握り固めて、麻糸でギリギリギリと巻き立  
てて手鞆てまりぐらいの大きさになったら、それで出来上りだ。ここまでは誰でも出来るが、そ  
いつを左手に持ちながら立ち上つて、波の下に渦巻く魚群を見い見い見い導火線くちびを切る。この  
導火線くちびの寸法なるものが又、彼奴等きやつの永年の熟練から来ているので、所謂、教化別伝の秘  
術という奴だろう。魚群の巨大おおきさや深さによって咄嗟とつさの間に見計みはからいを付けるのだからナ  
カナカ難かしい。……その導火線くちびを差込んだ爆薬を右手に持ち換えて……左利きの奴も時

々居るそうだが……片手に火を付けた巻線香を持ちながら、両方の切り口を唇に近付ける。背後うしろを振り返って、

「ソロソロ漕げ……ソロソロ……ソロソロ……」

と呼吸を計はかつているうちに、鯖の群れ工合を見て導火線くちびの切口と、線香の火をクツ付けて……フツ……と吹く。……シュツシュツと……来た奴をモウ一度、見計らつて一気に投げる。はるかの水面に落ちて泡を引きながらグングン沈む。水面下に大渦を巻いている鯖の大部の中心に来たと思う頃、ビシインという震動が船に来て、波の間から電光形の潮しほ飛沫おしほぎが迸ほとばしる。……ソレッツ……というので漕ぎ付けるとサア浮くわ浮くわ。何しろ何十万ともわからない魚群の中心で破裂するんだからタマラない。五六間四方ぐらいは背骨が切れる。臍腑が吹き出す。十四五間四方ぐらいは急激脳震盪のうしんとうを起して引っくり返る。その外側の二十間四方ぐらいの奴は眼をまわして、あとからあとから海面が真白になる程浮き上る。その中を漕ぎまわる。掬すくう。漕ぐ。掬すくう。瞬くうちに船一パイになったら、残余あとはソレキリ打つちやらかした。勿もつたい体たいないが惜しい事はない。タカダカ三円か五円ソコロの一発だからね。マゴマゴして巡邏船じゆんらせんにでも見付かつたら面倒だ。

それあ危険な事といったら日本一だろう。その導火線を切り損ねて、手足や頭を飛ばし



た奴が又、何百何千居るか知れないんだが、そんなのは公々然と治療も出来なければ葬式も出せない。十中八九は水葬礼だが、これとても惜しい生命いのちじゃないらしい。

論より証拠……春鯖から秋鯖の時季にかけて、南朝鮮の津々浦々をまわって見たまえ。

到る処に白首しらくびの店が、押すな押すなで軒を並べて、弦歌げんかの声、湧くが如しだ。男も女も、老爺じじいも若造わかぞうも、手拍子を揃えて歌っているんだ。

「百円紙幣さつがア　　浮いて来たア

百円紙幣さつがア　　浮いて来たア

ドオンと一発　　掴み取りイ

浮いたア浮いたア　　エツサツサア

浮いたア浮いたア　　エツサツサア

お前が抱かれて　　くれるならア

片手や片足　　何のそのオー

首でも胴でも　　スツトコトン

明日あすの生命いのちが　　スツトコトン

スットコスットコスットコトン

浮いたア浮いたア　　エツサツサア

百円紙幣さつがア　　浮いて来たア……」

と来るんだ。どうだい……コイツが止めやられるかどうか考えてみたまえ。

こうして財布の底までハタイてしまうと、明日あすは又一葉の扁舟へんしゅう、万里の風」だ。

「海上の明月、潮うしおと共に生ず」だ。彼等の鴨緑江おうりょくこう節を聞き給え……。

「朝鮮とオ——

内地うちざかいのオノ日本海にっぽんかいイ——

揚げたア——片帆かたほがア——アノよけれエ——ど——もオ——。ヨイシヨ……

月は涯はてし——も——ヨツコラ波枕なまくらヨオ——いつか又ア——女郎衆ぢやうじゆうのオ——膝枕ひざまくらア——」  
と来るんだから遣り切れないだろう。海国男児かいこくなんにの真骨頂まこていだね。

そのうちに又、ドオンと来る。五千、一万の鯖さばが船一パイに盛り上る。コイツを発動機はつどうきの沖買おきいが一尾びき二三銭か四五銭ぐらいの現金なまで引取ひきとって、持もって来る処ところが下関ひがしの彦島ひこしま

か六連島あたりだ。そこで一尾七八銭当りで上陸して、汽車に乗って大阪へ着くとドンナに安くても十四五銭以下では泳がない。君等は二十銭以下の大鯖を喰った事があるかい。無いだろう。どの位儲かるかは、この一事を以て推して知るべしだよ。

ところでサア……こうなると所謂、資本家連中が棄てておかない。今でも××の海岸にズラリと軒を並べている※友とか○金とかいう網元へ船を漕ぎ付けた漁師が、仕事をさしてくれと頼むかね……そうすると店の番頭か手代みたような奴が、物蔭へ引っぱり込んで、片手で投げるような真似をしながら「遣るか」と訊く。そこで手を振って「飛んでもない……そんな事は……」とか何とか云おうものなら、文句なしに追払いだ。誰一人雇い手が無いというのだから凄いだらう。

そればかりじゃない。そうした各地の網元の背景には皆それぞれの金権、政権が動いているのだ。その頭株が最初に云ったような連中だが、その配下に到っては数限りもない。みんなこの爆薬の密売買だの爆弾漁業だの産を成した輩ばかりだ。しかも彼等が爆弾漁業者……略して「ドン」と云うが、そのドン連中に渡すダイナマイトというのが、一本残らず小石川の砲兵工廠から出たものだ。梅や、桜や、松、鶴、亀の刻印を打ったパリパリなんだから舌を捲くだらう。

どこから手に入れるかつて君、聞くだけ野暮だよ。強ちに北九州ばかりとは云わない。全国各地の炭山、金山、鉾山の中に、本気で試掘を出願しているのがドレ位あると思う。些くとも半分以上はこの「ドン」欲しさの試掘願いだと云つても過言じゃない。しかもその願書の裏を手繰つて行くと又一つ残らず、最初に云つた巨頭連中の、どれかに引つかかつて行く事は、吾輩が首を賭けて保証していいのだ。……同時に彼等巨頭連が、こうした非合法手段で巨万の富を作りつつ、一方に極力、不正漁業を奨励して天与の産業を破壊している事その事が、如何に赤い主義者や、不逞鮮人の兇悪運動を庇護、助長しているか。日本民族の将来の発展に対して、如何に甚しい障害を与えているか……という事実は、吾輩が改めて説明する迄もないだろう。

ところが今云つた巨頭連中は、そんな事なんかテンデ問題にしていけないのだ。……勅令……内務省令、糞を啖らえだ。いよいよ団結を固くして、益々大資本を集中しつつ、全国的に鋭敏な爆薬取引網を作つて行く。それが現在、ドレ位の大きさと深さを持つているかはあの報告書を引っぱり出す迄もない。吾輩の話だけでもアラカタ見当が付くだろう。

そこで、こんな風に爆弾漁業が大仕掛になつて横行し始めると、何よりも先にタマラないのは、云う迄もなく南鮮沿海五十万の普通漁民だ。

しかも絶滅して行くのは鯖ばかりじゃない。全然爆薬の音を聞かされた事のない、ほかの魚群までもが、テンキリ一匹も岸に寄付かなくなるんだから事、重大だろう。

……ウン……それあ実際、不思議な現象なんだ。専門の漁師に聞いたって、この重大現象の理由はわからない。魚同志が沖で知らせ合うんだろう……ぐらいの説明で片付けている……いわば海洋の神秘作用と云つてもいい怪現象なんだが、コイツを科学的に研究してみると何でもない。頗る簡単な理由なんだ。

そもそも鯖とか、鰯とかいう廻游魚類が、沿岸に寄つて来る理由はタツタ一つ……その沿岸の水中一面に発生するプランクトンといって、寒冷紗の目にヤット引つかかる程度の原生虫、幼虫、緑草、珪草、虫藻なぞいう微生物を喰いに来るのが目的なんだ。

だからその寄つて来る魚群を溫柔しく網で引いて取ればプランクトンはいつまでもいつでも居残つてあとからあとから魚群を迎える事になる。発動機船の底曳網でも、かなり徹底的に、沿海の魚獲を引泄つて行くには行くが、それでもプランクトンだけは確実に残して行くのだ。

ところが爆漁と来ると正反対だ。あつちでもズドン、こつちでもビシンと爆発して、生

き残った魚群の神経に猛烈な印象をタタキ込むばかりでない。そこいらの水とおんなじ位に微弱なプランクトンの一粒一粒を、そのシヨックの伝わる限りステキに遠い処までも一ペんに死滅させて行くんだからタマラない。……対州が何よりのお手本だ。……餌の無い海に用はないというので、魚群は年々、陸地から遠ざかって行くばかり……朝鮮海峡をサツサと素通りするようになる。年額七百万円の鯖が五百万、二百万と見る見るうちにタタキ下げられて行く。税金が納められないどころの騒ぎじゃない。小網元の倒産が踵くびすを接して陸りくぞく続する。吾輩が植え付けた五十万の漁民が、眼の前でバタバタと飢死して行くのだ。ここに於て吾輩は猛然として立上った。實際、臟腑はらわたのドン底から慄ふるえ上ってしまったのだ。……爆弾漁業、殲滅せんめつすべし。鮮海五十万の漁民を救わざるべからず……というので、第一着に総督府の諒解を得て、各道の司法当局に檄げきを飛ばした。続いて東京の各省の諒解の下に、北九州、山陰、山陽の各県水産試験場、南鮮の各重要諸港で、十二節ノット以上の発動機船を準備してもらった奴に、武装警官を乗組ませて、ドン船と見たら容赦なく銃口を向けさせる。これは対州の警察が嘗めさせられた苦い経験から割出した最後手段だ。一方にその頃まだ鎮海ちんかい湾に居た水雷艇隊を動かしてもらって、南鮮沿海を櫛すの齒で梳くように一掃してもらおう事になった。……というのは吾輩が、司令官の武重たけしげ中将を膝詰談判

で動かした結果だったがね。

とにかくコンナ調子で、爆弾漁業を本気で掃蕩し始めたのはこの時が最初だったものだから、その騒動といったらなかつたよ。南鮮沿海に煮えくり返るような評判だった。

ところがここに、お恥かしい事には、吾輩、元来、漁師向きに生れ附いただけあって、頭が単純に出来ているんだね。そんな風に吾輩の弁力のあらん限りを動員して、爆弾漁業と青眼に切り結んだところは立派だったが、その当の相手の爆弾漁業者の背景に、どんな大きな力が隠れているか……彼等が何故に砲兵工廠の「花スタンプ」附きの爆薬ハツパを使っているか……なぞいう事を、その頃まで夢にも念頭に置いていなかったんだから何にもならない……。要するに単純な、無鉄砲な漁師どものアバズレ仕事とばかり思い込んでいたものだから、一気に片付けるつもりで追いまわしてみると、どうしてどうして。水雷艇や巡邏船が百艘や二百艘かかたつてビックともしない相手である事が、一二年経つうちに、だんだんと判明わかつて来たもんだ。

第一に驚かされたのは彼奴等きやつの船の数だった。石川や浜の真砂まじしどころではない。慶南、慶北沿海の警察の留置場が、満員するほど引つ捕えても、どこをドウしたかわからないく

らい夥しい船が、抜けつ潜りつ荒しまわる。朝鮮名物の蠅と同様、南鮮沿海に鉄条網でも張り廻わさなければ防ぎ切れそうに見えないのだ。

それから第二に手を焼いたのは、その密漁手段の巧妙なことだ。「ドーン」という音を聞き付けた見張りの水雷艇が、テツキリあの舟だというので乗付けて見ると、果せるかなビチビチした鯖を満載している。そこで「この鯖をドウして獲ったか」と詰問すると澄ましたものだ。古ぼけた一本釣の道具を出して「ちようど大群むれに行きましたので……」という。「しかしタツタ今聞えたのは確かに爆薬ダイナマイトの音だ。ほかに船が居ないから貴様達に違いあるまい」と睨み付けると頭を搔かてセセラ笑いながら「そんなら舟を陸に着けますから一つ調べておくんさい」と来る。そこで云う通りにしてみると成る程、巻線香のカケラも見当らないから……ナアーンダイ……というので釈放する。

実に張合いのない話だが、しかし考えてみると無理もないだろう。水兵や警官は漁師じやないんだからね。爆弾船ドンぶねの連中が持つている一本釣の道具が、本物かそれとも胡麻ごま化し用の役に立たないものかといったような鑑別が一眼で出来よう筈がない。とりあえず糸テグスを引切ひっきつてみればタツタ今まで使ったものかどうかは吾々の眼に一目瞭然なんだが……爆弾ドンぶね船ぶねに無くてはならぬ巻線香だつて、イザという時に海に投げ込めばアトカタもない。もつ



とも生命いのちから二番目のダイナマイトはなかなか手離さないが、その隠匿かくしどころが亦、実に、驚ろくべく巧妙なものなんだ。帆柱を立てる腕木を刳くり抜いたり、船の底から丈夫な糸で吊したり、沢庵漬たくあんづけの肉を抉えぐつて詰め込んだり、飯櫃めしびつの底を二重にしていたりする。そのほか、狭い舟の中でアユル巧妙な細工をしている上に、万一あぶないとなれば鼻の先で手を洗う振りをしながらソツと水の中に落とし込む。その大胆巧妙さといったら実に舌を捲まくばかりで、天勝てんかつの手品以上の手練を持っているんだからトテモ生なまやさしい事で捕まるものでない。何しろ彼奴等きやつは対州鱒たいしゅうぶり時代に手厳しい体験を潜ひそめて来ているのだからね。……そこで吾輩はモウ一度、引返して、各道の判検事や警察官に、爆弾船ドムンぶねの検挙、裁判方法を講演してまわるという狼狽わづらのし方だ。泥棒を見て縄を綱なうのじやない。追っかけながら藁わらを打うつんだから、およそ醜態しうたいといつてもコレ位の醜態はなかつたね。

ところがここで又一つ……一番最後に驚ろかされたのは、吾輩のそうした講演を聞きに来ている警察官や、判検事連中の態度だ。先生方がお役目半分に、洩しぶしぶ々聞ききに來ている態度はまあいいとして、その大部分が本当に氣乗りがしていかないばかりじやない。何となく吾輩の演説を冷笑的な氣分で聞いている事が、最初から吾輩の頭にピンと來たもんだ。これは演壇に慣れた人間に特有の直感だがね……のみならず中には反抗的な態度や、嘲笑

的な語気でもって質問を浴びせて来る奴が居る。しかもその質問というのが十人が十人紋もんんきりがた切型だ。

「一体、爆弾漁業というものは違法なものでしょうか。……巾着網きんちやくあみよりも底曳網そこひきの方が有利だ……底曳網よりも爆弾漁業の方が多量の収穫を挙げる……というだけの話で、要するに比較的収益が多いというだけのものじゃないですか。……だからこれを犯罪とせずには正當の漁業として認可したら却かえって国益になりはしまいか。これを禁止するのは炭坑夫にダイナマイトを使うな……というのと、おなじ意味になるのじゃないですか」

と云うのだ。……どうも法律屋の議論というものは吾輩に苦手なんでね。吾々みたいな粗笨あらっぽい頭では、どこに虚構おちが在るか見当が附かないんだ。そこで止むを得ず受太刀うけだちにまわつて、南鮮沿海の漁民五十万の死活しうかくに関する所以ゆゑんを懇々と説明すると、

「それならばその普通漁民も、ほかの方法で鯖とを獲る方針にしたらいいでしよう。朝鮮沿海に魚が居なくなったら、露領へでも南洋にでも進出したらいじやないですか」

と漁業通を通り越したような無茶を云い出す。ドウセ無責任と無智をサラケ出した逃げ口上だがね。そこで吾輩が躍起やつきとなつて、

「それでも銃砲火薬類の取締上、由々ゆゆしき問題ではないか」

と逆襲すると、

「それは内地の司法当局の仕事で吾々に責任はありません」

と逃げる。実に腸が煮えくり返るようだが、何を云うにもソウいう相手にお願ひしなければ取締りが出来ないのだから止むを得ない。情なく情なく頭を下げて、

「とにかくソナナ事情ですから、折角定着しかけた五十万の南鮮漁民を助けると思つて、何分の御声援を……」

と頼み入ると、彼等は冷然たるもので、

「それはまあ、総督府の命令なら遣つて見ましようが、何しろ吾々は陸上の仕事だけでも手が足りないのですからね」

といったような棄科白すてぜりふでサツサと引上げてしまふ。怪しからんといつたつてコレ位、怪しからん話はない。無念……残念……と思ひながら彼奴等きやつの退場する背後姿うしろを、壇上から睨み付けた事が何度あつたかわからないが、思えばこの時の吾輩こそ、大馬鹿の大馬鹿の三太郎だつたのだね。

こんな事実が度たび重なるうちに……吾輩ヤツト気が付いたもんだ。君だつてここまで聞いて来れば大抵、感付いているだろう。……ウンウン。その通りなんだ。明言したつて構

わない。爆弾密売買の元締連中の手が朝鮮の司法關係にまで行きまわっているんだ。何しろその当時の朝鮮の官吏と来たら、総督府の官制が発布されたばかりの殖民地気分の方ホヤ時代だからね。月給の高価たかいのを目標に集まつて来たような連中ばかりだから、内地の官吏よりもズツト素質が落ちていたのは止むを得ないだろう。……それと気が付いた吾輩は、それこそ地団太じだんたを踏んで口惜しがったものだ。地団太の踏み方がチツトばかり遅かったが仕方がない。

そこでボンヤリながらもそうと気が付くと同時に吾輩は、ピツタリと講演を止めてしまつて、爆弾漁業の本拠さく探りに没頭したもんだ。先ず手頃の人間で吾輩のスパイになつてくれる者は居ないか……と頻りに近まわりの人間を物色してみたが、それにしてもウツカリした奴にこの大事は明かせない。何しろ五十万人の死活問題を背負つて立つだけの器量と、覚悟を持つた奴でなければならぬ上に、ドンドンの背景となつて連中が又、ドレ位の大物なのか見当が付かないのだから、とりあえず佐倉宗五郎以上の鉄石心てつせきしんが必要だ。もちろん組合の費用は全部、費消つかつても構わない覚悟はきめていた訳だがそれでも多寡たかは知れている。それを承知で活躍する人間といつたら、当然、吾輩以上の道楽け気が無くちやならんだろう……ハテ……そんな素晴らしい変り者が、この世界に居るか知らんと、眼を皿の

ようにして見廻わしているところへ、天なる哉、命なる哉。思いもかけない風来坊が吾輩の懐中へ転がり込んで来る段取りになつた。

……ところでドウダイもう一パイ……相手をしてくれんと吾輩が飲めん。飲まんと舌が縛れるというアル中患者だから止むを得んだろう……取調べの一手にソソナのが在りやせんか……アツハツハツ……。

ナニ。この三杯酔かい。こいつは大丈夫だよ。林青年の手料理だが、新鮮無類の「北枕」……一名ナメラという一番スゴイ鰻の赤肝だ。御覧の通り雁皮みたいに薄切りした奴を、二時間以上も谷川の水でサラシた斯界極上の珍味なんだ。コイツを味わわなければ共に鰻を語るに足らずという……どうだい……ステキだろう。ハハハ……酒の味が違って来るだろう。

杯……。いよいよこれから吾輩が、林の親仁を使つて爆弾漁業退治に取りかかる一幕だ。サア返杯……。

ナニ。林のおやじ……？ ウン。あの若い朝鮮人……林の親父だよ。まだ話さなかつたっけな……アハハハ。少々酔つたと見えて話が先走つたわい。

何を隠そうあの林りんという青年は朝鮮人じゃないんだ。林友吉はやしともきちという爆弾漁業者トの一人息子で、友太郎という立派な日本人だ。彼奴あいつの一身上の事を話すと、優に一篇の哀史が出来上るんだが、要するに彼奴あいつのおやじの林友吉というのは筑後柳河やながわの漁師だった。ところが若いうちに、自分の嬢かかあと、その間男まおとこをした界限切つての無頼漢ゴロツキを叩き斬つて、八ツになる友太郎を一人引つ抱えたまま、着のみ着のまままで故郷を飛出して爆弾漁業者トの群に飛び込んだという熱血漢だ。

ところがこの友吉という親仁おやじが、持つて生れた利かぬ氣の上に、一種の鋭い直感力を持つていたらしいんだね。いつの間にか爆薬密売ト買ヤの手筋を呑み込んでしまつて、独力で格安な品物を仕入れては仲間に売る。彼等仲間で云う「抜け玉」とか「コボレ」とかいう奴だ。そうかと思うと沖買コツいの呼吸コツを握り込んで「売るなら買おう」「買うなら売るぞ」「捕るなら腕で来い」といったスゴイ調子で南鮮沿海を荒しまわる事五年間……悴せがれの友太郎とおも十歳の年から櫓柄ろづかに掴まつて玄海の荒浪を押し切つた。……親父おやじと一所に料理屋へも上つた……というんだから相当のシロモノだろう。

然るにコイツが、ほかの爆弾連ト中の氣に入らなかつた……というよりも、彼等の背後から統制している巨頭連の眼障めざわりになつて来た……と云つた方が適切だろう。

忘れもしない明治四十五年の九月の五日だった。吾輩がこの絶影島の裏手の方へ、タツタ一人で一本釣に出た帰り途にフト見ると、遙かの海岸の浪に包まれた岩の上に、打ち上げられたような人間一人横たわっている。その上に十二三ぐらいの子供が取り縋って泣いている様子だから、可怪しいと思ひ、危険を冒して近寄ってみると、倒れているのは瘠せコケた中年男だが、全身紫色になった血まみれ姿だ。そこでいよいよ驚きながら、何はともあれ子供と一所に舟へ収容して、シクシク泣いている奴の様子を聞いてみると、こんな話だ。

「……ウチの父さんが昨日、この向うでドンをやっていたら、どこからか望遠鏡で覗いていた水雷艇に捕まって、釜山の警察に引っぱって行かれた。……その時にウチはメチャクチャに泣き出して、父さんの頸にカジリ付いて、イクラ叱られても離れなかった。……そうしたら警察の奥の方から出て来た紋付袴の立派な人が、ウチ達をジロジロ見て、警部さんに許してやれと云うたので、タツタ一晚、警察に寝かされただけで、きょうの正午過ぎに釈放された上に、舟まで返してもらった。父さんは大層喜んで、お前の手柄だと云って賞めてくれた。

……そうしたら又……釜山の南浜から船に乗って、絶影島を廻ると間もなく、荒くれ

男を大勢載せた、正体のわからない発動機船ボンボンが一艘、どこからか出て来て、父さんとつを捉まえて踏んだり蹴けこつたりしたから、ウチもその中の一人の向う脛に噛み付いてやったら、一気に海へ蹴けこ込まれてしまった。……ウチの父さんとつは、平生いつもから小型ちいさな、鱧捕りふかどの短導火線ハヤク弾チを四ツ五ツと、舶来の器械まっち燐寸よういを準備していた。これさえ在れば発動機船ボンボンの一艘二艘、物は言わせんと云うとつたのに、釜山の警察で取上げられてしまったお蔭で負けてしまった。それが残念で残念で仕様がなない。

……そのうちに発動機船ボンボンは、父さんとつの身体からだを海に投込んでウチ達の舟を曳いたまま、どこかへ行つてしまった。その時に波の間を泳いでいたウチは直ぐに父さんとつの身体からだに取り付いて、頭を抱えながら仰向き泳ぎをして、一生懸命であの岩の上まで来たけれど、向うが絶壁きりぎしで登りようがない。そのうちに汐しおがさして来て、岩の上が狭くなつたから、どこかへ泳いで行くつもりで、父さんとつの耳に口を当て、「待っておいで……讐敵かたきを取つてやるから」と云うていた。そうしたら先生が来て助けてくれた。……ウチは今年十二になる。ドンは怖くない。面白い……」

というのだ。ウン。とてもシツカリした奴なんだ。第一そういう面魂つらだましが尋常じやなかつたよ。お乳母んばひがき日傘でハトポツポーなんていった奴とは育ちが違うんだからね……。



……ウンウン。そうなんだ。つまり彼等仲間の所謂「私刑」に処せられた訳だ。その紋付袴の男が誰だったか、今だに調べてもいないが、むろん調べる迄もない。林友吉の頭脳と仕事ぶりを警戒していた、釜山の有力者の一人に相違ないのだ。そいつが友吉親子の顔を見知っていたので、それとなく貰い下げて追いつ放した奴を、外海で待伏せていた配下の奴が殺ったものに違いないね。……もつとも友吉おやじがその筋の手にかかったのはこの時が皮切りだったから、或は余計な事でも饒舌られては困る……という算段だったかも知れないがね……。

とにかく、そんな訳で舟を漕ぎ漕ぎ友太郎の話聞いて行くうちにアラカタの事情がわかると吾輩大いに考えたよ。……待て待て……この子供を育て上げて、この復讐心を利用しながら爆薬漁業の裏道を探らせたら、存外面白い成績が上がるかも知れん。かなり気の長い話だが五年や十年で絶滅する不正爆薬ではあるまいし、急がば廻われという事もある。それにはこの死骸を極秘密裡に片付けて、悴を日蔭物にしないようにしなければならぬ。普通の墓地に葬って墓を建ててやらねばならぬが、何とか名案は無いものか……と色々考えまわしているうちに釜山港に這入った。そこで夕暗に紛れて本町一丁目の魚市場の蔭に舟を寄せると、吾輩の麦稈帽を眉深に冠せた友吉の屍体を、西洋手拭で頬冠りした吾

輩の背中に帯で括り付けた。片手に友太郎の手を索いて、程近い渡船場際の医者の家へ辿り付いたものだが、その苦心といったらなかつたよ。夕方になると市が立って、朝鮮人がゾロゾロ出て来る処だからね。

ところで又、その医者というのが吾輩の親友で、鶴髪、童顔、白髯という立派な風采の先生だったが、トテモ仕様のない泥酔漢の貧乏老翁なんだ。そいつが吾輩と同様独身者の晩酌で、羽化登仙しかけているところへ、友吉の屍体を担ぎ込んで、何でもいいから黙って死亡診断書を書いてくれと云うと、鶴髪童顔先生フラフラの大ニコニコで念入りに診察していたが、そのうちに大声で笑い出したものだ。

「……アツハツハツハツ。折角持つて来なすつたが、これは死亡診断を書く訳にいかんわい。まだ脈が在るようじゃ。アツハツハツハツハツ……」

という御託宣だ。……馬鹿馬鹿しい。何を吐かす……とは思つたが、忪が飛び上つて喜ぶし、吞兵衛ドクトルも、

「……拙者が請合つて預かろう。行くか行かんか注射を試してみたい……」

と云うから、どうでもなれと思つて勝手にさしておいたら……ドウダイ。二日目の朝になつたら眼を開いて口を利くようになった。

傷口も処々乾いて来た。熱も最早引き加減……という報告じゃないか。吞兵衛先生、案外の名医だったんだね。おまけに悴の友太郎が又、古今無双の親孝行者で、二晩の間ツラりともしない介抱ぶりには、流石のワシも泣かされた……という老医師の涙語りだ。

そこで吾輩もヤツト安心して、組合の仕事に没頭しているうちに、忘れるともなく忘れていると、二三週間経つうちに、それまでチヨイチヨイ吾輩の処へ飲みに来ていた老医師がパツタリと来なくなった。……ハテ。可笑しい……もしや患者の容態が変つたのじゃないか知らん。それとも吞兵衛先生御自身が、中氣にでもかかったのじゃないか知らん……考えているうちに、急に心配になつて来たから、チツトばかりの金を懐中に入れて、医院の門口から覗き込んでみると、開いた口が三十分ばかり塞がらなかつた。

鬚だらけの脱獄囚みたいな友吉おやじと、鶴髪童顔、長髯の神仙じみた老ドクトルが、グラグラ煮立つた味噌汁と虎鯢の鉢を真中に、片肌脱ぎか何かの差向いで、熱燗のコップを交換しているじゃないか。おまけに酌をしている悴の友太郎を捕まえて、

「……野郎。この事を轟の親方に告口しやがたらタラバ蟹の中へタタキ込むぞ」

と怒鳴っているのには腰を抜かしたよ。医者か医者なら病人も病人だ。世の中にはドンナ豪傑がいるか知れたものじゃない。……むろん吾輩の方から低頭平身して仲間に入れて

もらつたが、その席上で友吉おやじは吾輩の前に両手を突いて涙を流した。

「……もうもうドン商売は思い切りました。これを御縁に貴方の乾兒こぶんにして、小使でも何でもいい一生を飼殺しにして下さい。悴を一人前の人間に仕立てて下さい。給金なんぞは思いも寄らぬ。生命いのちでも何でも差出します」

という誠意満面の頼みだ。

吾輩が、そこで大呑込みに呑込んだのは云うまでもない。

そこで今まで使つていた鮮人に暇を出して、鬚だらけの友吉おやじを追い使う事になつたが、そのうちに機会を見て、吾輩の胸中を打明けてみると、友吉おやじ驚くかと思いの外平氣ほかの平左でアザ笑つたものだ。

「……へへへ……そのお話なら私がスパイになるまでも御座いません。とりあえず私が存じておりますだけ饒舌しゃべつてみましょう。それで足りなければ探つても見ましようが……」

と云うのでベラベラ遣り出したのを聞いている中うちに吾輩ふるえ上つてしまつたよ。この貧乏な瘠せおやじが、天下無双の爆薬密売買とドン漁業通の上に、所謂、千里眼、順風じゆんぷう耳みみの所有者だという事をこの時がこの時まで知らなかつたんだからね。

とりあえずあいくち匕首のどを咽喉元のどに突付けられたような気がしたのは、対州から朝鮮に亘るド

ン漁業の十数年来の根拠地が、吾輩の足元の釜山絶影島まぎのしまだという事実だった。

「……それが虚構うそだと云わつしやるなら、この窓の処へ来て見させえ。あの向うに見える絶影島のズツト右手に立派な西洋館が建つておりましょう。あの御屋敷は、先生の御親友で釜山一番の乾物問屋の親方さんのお屋敷と思いますが、あの西洋館の地下室に詰まっている乾物の中味をお調べになつた事がありますかね」

と来たもんだ。

燈台下もと暗しにも何にも、吾輩はその親友と前の晩に千芳閣で痛飲したばかりのところだったから、言句ことばも出ずに赤面させられてしまった。

「……お気に障さわつたら御免なさいですが、林友吉は決してお座なりは申しません。内地から爆薬ハツバを、一番安く踏み倒おして買うのが、あのお屋敷なんです。アラカタ一本七十五銭平均ぐらいにしか当りますまい。お顔と財産が利いている上に現金払いですから、安全な事はこの上なしですがね。

……爆弾ハツバの出先は何といつても九州の炭坑やまが第一です。一本十銭か十五銭ぐらいで坑夫に売りますが、その本数を事務所ごまかで誤間化して一本三十銭から五十銭で売り出す……ズツト以前の取引ですと手頃の柳行李やなぎこくりに一パイ詰めた奴を、どこかの横路次で、顔のわか

らない夕方に出会った鳥打帽子のインバネス同志が右から左に、無<sup>だんまり</sup>言<sup>げんナマ</sup>で現金と引き換え  
る……だから揚げられても相手の顔は判<sup>わか</sup>然<sup>か</sup>らん判<sup>わか</sup>然<sup>か</sup>らん突張り通したのですが、今で  
はソナナ苦勞はしません。電車や汽車の中で大ビラに靴<sup>かばん</sup>を交換するのです。……売る奴は  
大抵炭坑関係かその地方の人間で、買う奴は専門の仲買いか、各地の綱元の手先です。そ  
んな連中の靴の持ち方は、仲間に入っていると直ぐにわかりますからね。以心伝心で、  
傍に寄つて来て靴を並べておいてから、平気な顔で煙草の火を借りる。一<sup>いっしょ</sup>所に食堂に行  
つて話をきめる。途中の廊下で金を渡して、馱<sup>た</sup>に着いてから相手の靴を片手に……左様な  
ら……と来るのが紋<sup>もんきり</sup>切<sup>がた</sup>型<sup>がた</sup>です。三等車で遣つてもおなじ事ですが、決して間違いはあり  
ません。一度でもインチキを遣つた奴は、永い日の目を見た例<sup>ためし</sup>がありませんからね。

……そんな仲買連中は若松や福岡にもポツリポツリ居るには居ります。しかしそんな爆  
薬のホントウに集まる根城というのが、四国の土佐海岸だという事は、いかな轟<sup>とどろき</sup>先生でも  
御存じなかつたでしょう。今の貴族院の議員になつて御座る赤沢という華族様の生れ故郷  
と申上げたら、おわかりになりましたが、昔から爆<sup>ド</sup>弾<sup>ン</sup>村と云われた処で、今の赤沢様が、  
その総元締をして御座るのです。その又、総元締の配下になつて御座る大元締というのが、  
やはり日本でも指折りの豪<sup>えら</sup>い人達ばかりですが、その人達の手から爆<sup>ド</sup>弾<sup>ン</sup>村へ集まつて来

た爆薬が、チツポケな帆船ほまえに乗つて宇和島をまわつて、周防灘から関門海峡をノホホンで通り抜けます。昨日きのうの朝の西南風にしばえなら一先ず六連沖むつれおきへ出て、日本海にマギリ込みましよう。それから今朝けさの北東風きたこちに片尻をかけて、ちようど今時分、釜山沖へかかる順序ですが……ホーラ御覧なさい。あの馬山ばさん通いの背後うしろから一艘、二艘……そのアトから追付いて来る足の速いのも……アノ三艘の片帆の中で、どれでもええから捕まえて、船頭と話して御覧なさい。四国なま訛りじやつたら舟の中に、一梱こりや二梱こりの爆薬ハツパは請合います。松魚かつおの荷に作つてあるかも知れませんが、あの乾物屋さんに宛てた送り状なら税関でも大ビラでしょう。荷物を跟つけてみたら一ぺんにわかる事です。

……そのほかに爆薬ハツパの出る処は、大連たいれんと上海シャンハイですが、上海のは大きい代りに滅多に出ません。おまけに英国か仏蘭西製フランスできの上等品で、高価たかい上に使い勝手が違うのが疵きずです。大連のはやはり日本の桜印か松印ですが、これは大連から逆戻りして来る分量よりも、奥地へ這入る分量の方がヨツポド大きい。……どこへ落ち付くのか用が無いから探つても見ませんが、大連、營口えいこうから、満洲の奥地へ這入る爆薬ハツパは大変なものです。その中の一箱か二箱がタマに抜け出して朝鮮へ来るので、ドウカすると内地のものより安い事があります。これは支那の兵隊か役人が盗んで来たものだそうですが、それだけに油断も出来ませ

ん。非道い奴になると玉蜀黍の喰い殻に油を浸した奴を、柳行李一パイ百円ぐらいで掴まされた事があるそうです。

……ところでイヨイヨ朝鮮内地に来ますと、ソナ爆薬の集まる処が、この釜山の外に二三箇所あります。

……慶北の九龍浦は何といつても釜山の次でしょう。もつとも釜山に来た爆薬は、あのお屋敷の地下室に這入るだけです。九龍浦の方はチツト乱暴で、人里離れた海岸の砂の中に埋めて在るのです。私が今度、こんな目に会いましたのも、多分、この案内を嗅ぎ付けた事を知って、釜山の方へ手をまわしたのでしよう。

……それから九龍浦の次は浦項と江口で、ここは将来有力な爆薬の根拠地になる見込みがあります。この三個所は釜山と違って、巡查か警部補ぐらいが駐在している処ですから、丸め込むにしても大した手数はかからんでしょう。裁判所の連中でも、みんな美味しい事をしておりますので、その地方地方での一番の有力者が皆、爆薬の元締になっているのですから世話が焼けません。……そのほか四五月頃の巨文島、五、六、七月頃の巨濟島、入佐村、九、十、十一月の釜山、方魚津、甘浦、九龍浦、浦項、元山方面へ行って御覧なさい。先生のように爆薬漁業を不正漁業なんて云っている役人は一人も居りま



せんよ。ドン大明神様々というので、駐在巡査でも一ひと身代しんだい作っている者が居る位です。尋常きんじょうに巾着きんちやく網なや、長瀬網ながせを引いている奴は、馬鹿ばかみたようなもんで……ヘエ……。

……そのほかに爆薬の出で来る処は無いか……と仰おつしや言るのですか。ヘエ。それあ在るという噂は確かに聞いておりますが、本当か虚構うそかは私も保証出来ません。つまりそこ、ここの火薬庫の主任が、一生一代の大きなサバを読んで渡すことがあるそうで、古い話ですが大阪や、目黒の火薬庫の爆発はその帳尻ごまかを誤魔化ごまかすために遣つたものだとも云います。そのほか大勢で火薬庫を襲撃した事件も在ると申しますがドンナものでしょうか。新聞には出ていたそうですが……。

……そんな大物の捌はけ口くちが、ドン方面はばかりで無い事は保証出来ません。露西亞ロシアや、支那に売込んで行く様子も、この眼で見たんですからいつでも現場に御案内致しますが、しかし値段のところはちよつと見当が付きかねます。何でも長城ちやうじやうから哈爾濱ハルビンを越えようと爆薬ハツバの値段が二倍になる。露西亞境の黒龍江こくりゆうかうを渡ると四倍になるんだそうですが、これは拳銃ピストルでも何でも、禁制品やかましいものはミンナ同じ事でしょう。売国行為うりこくぎだか何だか存じませんが、儲かる事は請合こいで……エヘヘヘ……」

黙もくつて聞いていた吾輩は、この笑い声を聞くと同時に横ッ腹よこはらからゾーツとして来たよ。

話の内容がアンマリ凄いのと、思い切りヒネクレた友吉親子おやじの、平気な話ぶりに打たれたんだね。吾輩はその時にドツカリと椅子にヘタバリ込んだ。腕を組んで瞑目沈思したものだ。気を落付けようとしたが武者振いが出て仕様がなかったもんだ。

しかしその中うちに机テーブルを一つドカンと敲たたいて決心を据えると吾輩は、友吉親子を連れてコツソリと××を脱け出した。何よりも先に対岸の福岡県に馳け付けて旧友の佐々木知事を説と伏きくせて、出来たばかりの警備船、袖港丸しゅうこうまるを試運転の名目で借り出した。速力十六節ノットという優秀な密漁船の追跡用だったが、まだ乗組員も何も定きまっていなかった。こいつに油と食糧を積込んで、友吉親子に操縦法を仕込みながら西は大連、營口から南は巨済島、巨文島、北は元山、清津せいしん、豆満江とまんこうから、露領沿海州に到るまで要所要所を視察してまわること半年余り……いかな太つ腹の佐々木知事も内心大いに心配していたというが、それはその筈だ。電報一本、葉書一枚行く先から出さないのだからね。大いに謝罪あやまつてガチャガチャになった船を返すと、その足で釜山に引返して、友吉親子もろ共に山内閣下にお目にかかった。むろん官邸の一室で、十時過すぎに勝手口から案内されたもんだが、思いもかけない藁塚わらづか産業課長が同席して、吾輩と友吉おやじの視察談を、夜通しがかりに聞き取ってくれたのには感謝したよ。友吉親子一代の光栄だね。

その結果、藁塚産業課長が急遽<sup>きゆうきよ</sup>上京して、内務省、司法省、農商務省、陸海軍省と重要な打合わせをする。その結果、朝鮮各道の警察、裁判所に嚴重な達示が廻わって、銃砲火薬類取締の肅正、不正漁業徹底<sup>せんめつ</sup>滅の指令が下る。しかも総督府から指導のために出張した検事正や、警視連の指す<sup>ゆびさ</sup>処が一々不思議なほど凶星<sup>ずぼし</sup>に中<sup>あた</sup>る。各地の有力者が続々と検挙される。その留守宅の床下や地下室、所有漁場の海岸の砂ツ原、岩穴の奥、又は妾宅の天井裏や泉水の底なぞから、続々証拠物件が引上げられるという、実に疾風迅雷式の手配りだ。ここいらが山内式のスゴ味だったかも知れないがね。

それあ嬉しかったとも……吹けば飛ぶような吾々の報告が物をいい過ぎる位、いったんだからね。

しかしソナ事はオクビにも出せない。むろん総督府の方でも御同様だったに違いないが、その代りに今後、爆薬漁業の取締に就いて、万事、漁業組合長、轟技師の指導を受くべし……といったような命令が、各道の官庁にまわつたらしい。吾輩の講演を依頼する向きがソレ以来、激増して来たのには面喰つた。一時は、お座敷がブツカリ合つて遣り繰りが付かないほどの盛況<sup>たくまじゆう</sup>を逞したもんだ。流石<sup>さすが</sup>のドン様ドン様連中も、最早<sup>もはや</sup>イケナイと覺悟したらしいんだね。実に現金な、浅墓<sup>あさはか</sup>な話だとは思つたが、しかし悪い気持ちはしな

ったよ。とにもかくにもソナ調子で南鮮沿海からドンの声が消え失せてしまった。それに連れて沿岸から遠ざかっていた鯖の廻遊が、ダンダンと海岸線へ接近し初めたので、漁師連中は喜ぶまいことか……轟様轟様……というので後光がさすような持て方だ。

吾輩の得意、想うべしだね。「ソレ見ろ」というので友吉おやじと赤い舌を出し合ったが、これというの也要するに、あの吞兵衛老医師ドクトルのお蔭だというので、三人が寄ると触ると、大白たいはくを挙げて万歳を三唱したものだ。

ハツハツ……その通りその通り。どうも吾輩の癖でね。じきに大白を挙げたくなるから困るんだ。汝元来なんじ一本槍に生れ付いているんだから仕方がない。スツカリ良い気持になつて到る処にメートルを上げていたのが不可いけなかつた。思いもかけぬ間違ひから自分の首をフツ飛ばすような大惨劇にぶつかる事になつた。ドン漁業に対する吾輩の認識不足が、骨髄に徹して立証される事になつたのだ。

……どうしてつて君、わからんかね……と……云いたいところだが、そういう吾輩も実をいうと気が付かなかつた。朝鮮沿海からドンの音が一掃されたので、最早もはや大願成就……金比羅こんびら様に願ほどきをしてよかろう……と思つたのが豈あにはか計らんやの油断大敵だつた。ドンの音は絶えても、内地の爆弾取締りは依然たる穴だらけだろう。ちつとも取締つた形

跡が無いのだ。藁塚産業課長の膝詰談判が、今度は「内地モンロー主義」にぶつかつていた事実を、ドンドコドンまで気付かずにいたのだ。

その証拠というのは外でもない。山内さんが内地へ引上げて内閣を組織されるようになった大正五年以後、折角、引締まっていた各道の役人の箍がグングン弛んで来たものらしい。それから間もなく大正八年の春先になると、一旦、終熄している爆弾漁業がモリモリと擡頭して来た。……一度逐い捲くられた鯖の群れが、岸に寄つて来るに連れて、内地から一直線に満洲や咸鏡北道へ抜けていた爆薬が、モウ一度南鮮沿海でドカンドカンと物をいい出すのは当然の帰結だからね。おまけに今度は全体の遣口が、以前よりもズット合理的になつて来たらしく、友吉親仁の千里眼、順風耳を以てしてもナカナカ見当が付けにくい。……これは後から判明した話だが、彼奴等は一時南鮮の孤島、欲知島の燈台守を買収してここを爆弾の溜りにしていた事がある。しかも燈台の上から高度の望遠鏡で、水雷艇や巡邏船を監視して、色々な信号を発していた……というのだから、如何にその仕事が統制的で、大仕掛であつたかが想像されるだろう。

然るに、ソナ程度にまでドン漁業が深刻化しつつ擡頭して来ている事を、夢にも知らなかつた吾輩はアタマから呑んでかかつたものだ。……懲り性もない鼠賊ども……俺

が居るのを知らないか。来るなら来い。タツターヒネリだぞ……というので、腕に縊よりを掛けて釜山一帯の当局連中を鞭撻にかかったものだが、その手初めとして取りあえず慶けい尚しやう南道うなんどうの有志、役人、司法当局四十余名を釜山公会堂に召集して、爆弾漁業勦滅そうめつの大講演会を開く事になった。これに各地方の有力者二十余名、臨時傍聴者三百余名を加えた有力の上もない聴衆を向うに廻わして吾輩が、連続二日間の爆弾演説をこころみる……というのだから、吾輩の意気、応まさに衝しょう天てんの概がいがあつたね。

大正八年……：昨年しんねんの十月十四日……：そうだ。山内さんが死なれる前の月の出来事だ。その第一日じつの午前十時から「爆弾漁業の弊害」という題下に、堂々三時間に亘つた概論を終ると、満場、割るるが如き大喝采だ。そのアトから各地の有力者うちの中でも代表的な五六名が、吾輩の休憩室に押掛けて来て頗すこぶる非常附きの持上げ方だ。

「……イヤ感かんぱい佩ぱい致ちしました。聴衆の感動は非常なものです。先生の御熱誠の力でしよう。三時間もの大演説がホンノちよつとの間まにしか感じられませんでした。当局連中もスツカリ感激してしまって、今更のように切齒せつしやく扼腕くわんしているような次第で……私共も一度はドンで年貢を納めさせられた前ナッポンサラミン科カ者シャばかりですが、今日の御演説を承りまして初めて

眼が醒めました。何でもカンでも轟先生が朝鮮に御座る間は悪い事は出来んなア……とタツタ今も話しながらこつちへ参りましたような事で……アハハハ……イヤ、恐れ入ります。……とところでここに一つ無理な御相談があります。御承諾願えますまいか。……というのは、ほかでもありません。本日集まっている当局連中の中には、先生の御講演を一度以上拝聴している者が多いのです。……ですから取締方法を詳しく承わっているにはいるのですが、しかし遺憾ながら爆弾漁業なるものの遣り方を実際に見た者が生憎、一人も居ないのです。そのために先生の御高説を拝聴しましても、何となく机上の空論といったような感じに陥り易い。……何とかしてその遣り方を实地に見せて頂きながら、御講演を承る事が出来たら……ちようど先生が海の上で、水産学校の卒業生を捉まえて御指導になるような塩梅式にですね……お願い出来たら、それこそ本格にピツタリと来るだろう。将来どれ位、实地の参考になるか知れん……という註文を受けましたものですから、まことに道理千万と思ひまして、実は御相談に伺った次第ですが……如何でしょうか。ちようど申分のない風ぎ続きですし、明日の上天気も万に一つ外れませぬし……乗船は御承知の博多通いで甲板の広い慶北丸が、船渠を出たばかりで遊んでおりますから、万一御許しが願えましたら、私共が引受けて万般の準備を整えたい考えであります。……それから実

演をする人間ですが、これは只今、釜山署に四人ばかり現行犯がブチ込んで在りますから、あの連中に遣れと云つたら、遣らんとは申しますまい……その方が聴き手の方でも身が入りはしますまいか」

という辞令の妙をつくした懇談だ。

ところで吾輩もこの相談にはチョツコン面喰めんくらつたね。コンナ計劃が違法か、違法でないかは、希望者が司法官連中と来ているんだから、先ず先ず別問題としても、そうした思とい附きの奇抜さ加減には取敢とりあえず度肝どきもを抜かれたよ。殺人犯を捕える参考のために、人殺しの実演を遣らせるようなもんだからね。……しかし何をいうにもこの談判委員を承つた連中というのが、人を丸める事にかけては専門の一流揃いと来ているんだ。如何にも研究熱の旺盛な余りに出たらしい脂切あぶらぎつた口調で、柔らかく、固く持もちかけて来たもんだから吾輩ウツカリ乗せられてしまった。……少々演説が利き過ぎたかな……ぐらうぬほいの自惚れ半分で、文句なしに頭を縦に振らせられてしまったが……しかし……というので吾輩の方も一つ一つの条件を持ち出したもんだ。

「……というのは、ほかの問題でもない。その爆弾漁業の実演者についてこつちにも一つ心当りがあるのだ。その人間はズツト以前にドンを遣っていた経験のある人間だが、当局



の諸君は勿論の事、一般の漁業関係の諸君が、その人間の過去を絶対に問わない約束をするなら、その生命いのちがけの仕事に推薦してみよう。現在ではスツカリ改心して、実直な仕事をしているばかりでなく、素敵もない爆弾漁業通だから将来共に、君等のお役に立つ人間じゃないかと思うが……」

と切り出してみた。これはかねてから日蔭者ひかげものでいた林友吉を、どうかして大手を振って歩けるようにして遣りたいと思つていた矢先だったから、絶好の機会チャンスと思つて提案した訳だったかね。

するとこの計略が図に当つて、忽ちたちまのうちに警察、裁判所連の諒解を得た。……それは一体どんな人間だ……と好奇の眼を光らせる連中もいるという調子だったから、吾輩、手を揉み合わせて喜んだね。早速横ツ飛びに本町の事務室に帰つて来て、小使部屋を覗いてみると、友吉親仁おやじは悴と差向いでへボ将棋を指している。そいつを捕まえてこの事を相談すると、喜ぶかと思いのほか、案外極まる不機嫌な面つらを膨ふくらましたもんだ。

「それはドウモ困ります。私は日蔭者で沢山なので、先生のために生命いのちを棄てるよりほか何の望みもない人間です。あんなへツポコ役人の御機嫌を取つて、罪ゆるを赦してもらう位いなら、モウ一度、玄海灘ふんとしで禪ぜんの洗濯をします。まあ御免蒙りまっしょう」

という二べもない挨拶だ。将棋盤から顔も上げようとしない。このおやじがコンナ調子になつたら梃ていでも動かない前例があるから弱つたよ。

「しかし俺が承知したんだから遣つてくれなくちや困るじゃないか。今更、そんな人間はいなかつたとは云えんじやないか」

とハラハラしながら高飛車をかけて見ると、おやじはイヨイヨ面つらを膨らました。

「それだから先生は困るというのです。アノ飲み助のお医者さんも云い御座つた。先生は演説病に取付かれて御座るから世間の事はチョツトもわからん。しかしあの病氣ばかりは薬の盛りようがないと云つて御座つたがマツタクじや。……一体先生は、アイツ等が本気で爆漁ト実演ンを見たがつていると思つていなさるのですか」

と手駒を放り出して突つかかつて来た。イヤ。受太刀うけたちにも何にも吾輩、返事に詰まつてしまつたよ。実をいうと二日間の講演をタツタ三時間に値切られてしまつた不平が、まだどこかにコビリ付いていたんだからね。こう云われると頭が妙に混線してしまつた。そのまま眼をパチパチさせていると、おやじはイヨイヨ勢い込んで突つかかつて来る。

「……先生は駄目だよ。演説バツカリ上手で、カンが働らんからダメだ。その役人連中の云い草一つで、チャンと向うの腹が見え透いているじやありませんか。……ツイこの間

も云うたでしょう。今度初まった爆弾漁業トの仕事ぶりが、どうも私の腑ふに落ちるところがある。この前のドン退治の時と違うて検挙の数がまことに少ないし、評判もサツパリ立たん。その癖に、下しものせき関せきから上がる鯖さばの模様を船頭連中に問うてみるとトテモ大層なものじゃ……昔の何層倍に当るかわからんという。値段も五六年前の半分か、三分の一というから生やさしい景気じゃない。不思議な事もあればあるもの……理屈がサツパリわからんと思うとつたが、わからんも道理じゃ。彼奴等きやつはこの前に懲こりて、用心に用心を踏んで仕事に掛かつてケツカル。朝鮮中の役所という役所の当り当りにスツカリ手を廻わして、仲間外れの抜け漁業ドンばかりを検挙させよるから、吾々の眼に止まらんです。……今来ているそこ、この有力者というのは、一人残らずそのドン仲間の親分株で、役人連中は皆、薬のまわつとるテレンキューばかりに違いありません。そいつ等らが、先生に睨にらまれんように、わざと頬冠ほくかんりをして聞きに来とるに違いないのです。それじゃケニ先生の演説が聞きともないバツカリに、そげな桁けたはず行れの註文を出しよつたのです。……それが先生にはわかりませんか……」

と眼の色を変えて腕を捲くつたもんだ。

今から考えるとこの時に、このおやじの云う事を聞いていたら、コンナ眼にも会わずに

濟んだんだね。……このおやじの千里眼、順風耳じゆんぷうじのモノスゴサを今となつて身ぶるいするほど思い知らされたものだが、しかしこの時には所謂いわゆる、騎虎きこの勢いという奴だった。そういう友吉おやじを頭から笑殺してしまったものだ。

「アハハハ。馬鹿な。それは貴様一流の曲り根性というものだ。お前は役人とか金持ちとかいうと、直ぐに白い眼で見る癖があるから不可いん。……よしんば貴様の云うのが事実としても尚更の事じゃないか。知らん顔をして註文通りにして遣つた方が、こっちの腹を見透かされんで、ええじゃないか。……アトは又アトの考えだ。……とにかく今度の仕事は俺に任せて云う事を聴け。承知しろ承知しろ……」

と詭弁まじりに押付けたが、そうなると又、無学おやじだけに吾輩よりも単純だ。云う事を云つてしまった形でシヨンボリとなつて、

「それあ先生が是非にという命令なら遣らんとは云いません。腕におぼえも在りますから……」

と承知した。するとその時に廿歳はたちになつていた悴せがれの友太郎も、親父おやじが行くならというので艫とせろを受持つてくれたから吾輩、ホツと安心したよ。友太郎はその時分まで、南浜なんびん鉄工所てつこうじょに出て、発動機の修繕つくろい工を遣る傍かたわら、大学の講義録を取つて勉強していたもんだが、

それでも櫓柄ろっかを握らしたらそこいらの船頭は敵かたわなかつた。よく吾輩の釣のお供を申付け  
て見せびらかしていた位だつたからね。

そこでこの二人を連れて、釜山公会堂に引返して、判事や検事連に紹介したが見覚えて  
いる者は一人も居なかつた。……断つておくが友吉おやじは、再生以来スツカリ天窓テツベンが  
禿げ上つてムクムク肥つていた上に、ゴマ塩の山羊髯やぎひげを生やしていたものだから、昔の面  
影はアトカタも無かつたのだ。又悴の友太郎も十二年から八年も経つていたのだから釜  
山署で泣いた顔なぞ記憶している奴が居よう筈はない。そこで釜山署に押収しておつた不  
正ダイナマイトを十本ばかり受取つた友吉親子は早速準備に取りかかる。吾輩も、午後の  
講演をやめて明日の实地講演の腹案にかかつた。……先ずドンを実演させて、捕つた魚の  
被害状態をそれぞれ程度分けにして見せる。これは魚市場から間接にドン犯人を検挙する  
ために必要欠くべからざる智識なんだ。それから爆薬製作の实地見学という、つまり逆の  
順序プログラムだつたが、実をいうと吾輩もドン漁業の実際を見るのは、生れて初めてだ  
つたから、細かいプログラムは作れない。臨機応変でやつつける方針にきめていた。

一方に各地の有志連は慶北丸をチャーターして万般の準備を整える。一方に吾輩を千芳  
閣に招待して御機嫌を取つたりしているうちに、その日は註文通りの静かな金茶色に暮れ

てしまった。

ところが翌る朝になつてみると又、驚いた。勿論、新聞記事には一行も書いて無かったが、向うの本棧橋の突端に横付けしている慶北丸が新しい万国旗で満艦飾をしている。五百噸ト足らずのチツポケな船だったが、まるで見違えてしまつている上に、デツキの上は丸で宴会場だ。手摺てすりからマストまで紅白の布で巻き立てて、毛氈もうせんや絨じゅうたん壇だんを敷き詰めた上に、珍味佳肴かじょうが山積して在る。それに乗込んだ一行五十余名と一いっしよ所に、地元の釜山はいうに及ばず、東萊とうらい、馬山ばさんから狩り集めた、芸妓げいしや、お酌しやく、仲居なかいの類いが十四五名入り交つて足の踏む処もない……皆、船に強い奴ばかりを選びすぐつたものらしく、十時の出帆前から弦歌の声、湧くが如しだ。

友吉親子が漕いで行く小舟に乗つて、近づいて行つた吾輩は、この体てい態たいを見て一種の義憤を感じたよ。……何とも知れない馬鹿にされたような気持ちになつたもんだが、しかし今更、後へ引く訳には行かない。不承不承に夕ラップへ乗附けると忽ちたちま歓呼かんこの声湧くが如き歓迎ぶりだ。すぐに甲板デッキへ引っぱり上げられて先ず一杯、先ず一杯と盃責めにされる。モトヨリ内兜うちかぶとを見せる吾輩ではなかつたので、引つぎ引つぎ傾けているうちに、

忘れるともなく友吉親子の事を忘れていた。

そのうちに慶北丸はソロリソロリと沖合いに出る。美事な日本晴れの朝風あきなぎで、さしもの玄海灘が内海うちうみか外海そとうみかわからない。絶影島まさのしまを中心に左右へ引きはえる山影、岩がんか角くは宛然たる名画の屏風びょうぶだ。十月だから朝風は相当冷めたかったが、船の中はモウ十二分に酒がまわって、処々ところどころ乱痴気騒らんちきさわぎが初まつている。吾輩の講演なんかどこへ飛んで行つたか訳がわからない状態だ。……そのうちに吾輩はフト思い出して……一体、友吉親子はドウしているだろうと船尾へまわつてみると、船の艫ともから出した長い綱に引かれた小舟の上に、チヨコナンと向い合つた親子が、揺られながらついて来る。何か二人で議論をしているようにも見えたが、吾輩が、

「オーイ。酒を遣ろうかあア……」

と怒鳴ると友吉親仁おやじが振り返つて手を振つた。

「……要りませえん。不要不要。それよりもこつちへお出いでなさあアイ」

と手招きをしている。その態度がナカナカ熱心で、親子とも両手をあげて招くのだ。

「いかにいかに。こつちはなア……お前達の仕事を見ながら、講演をしなくちやならん」  
と怒鳴つたが、コイツがわからなかつたらしい。悴の友太郎がグイグイ綱たぐを手繰つて船

を近寄せると、推進機スクリュウの飛沫しぶきの中から吾輩を振り仰いで怒鳴った。

「……先生……先生……講演なんかお止めなさい。おやめなさい。あんな奴等に講演したって利き目はありません。それよりも御ご一いっ所しょに鯖さばを捕って釜山へ帰りましょう。黙ってこの綱を解けば、いつ離れたかわかりませんから……」

というその態度がヤハリ尋常じゃなかったが、しかし遺憾ながら、その時の吾輩には氣付かれなかった。

「イヤ。ソナ事は出来ん。向うに誠意がなくとも、こつちには責任があるからなア。……とところで仕事はまだ沖の方で遣るのか」

「ええもうじきです、しかし暫く器械の音を止めてからでないとな鯖は浮きません。どつちみち船から見えんくらい遠くに離れて仕事をするんですからこつちへ入らっしゃい。大切だいじな御相談があるのです……どうぞ……先生……お願いですから……」

「馬鹿な事を云うな。行けんと云うたら行けん。それよりもなるべく船の近くで遣るようにしろ。器械の方はいつでも止めさせるから……」

「器械はコチラから止めさせます。どうぞ先生……」

と云う声を聞き捨てて吾輩は又、甲板デッキに引返して行つたが、この時の友太郎の異様な熱



誠ぶりを、知らん顔をしてソツポを向いていた友吉親仁の態度を怪しまなかつたのが、吾輩一期いちごの失策あらいだった。或はイクラかお神酒みきがまわっていたせいかも知れないがね。

ところで甲板デッキに引返してみると船はモウ十四海里も西へ廻つていて、絶影島は山の蔭になつてしまつていた。そのうちに機械の音がピツタリと止まつたから、扱さてはここから初めるのかな……と思つて立上ると、飲んでいる連中も気が附いたと見えて、我勝ちに上甲板や下甲板の舷ふなべりへ雪崩なだれかかつて来た。

「どこだどこだ。どこに鯖がいるんだ」

とキョロキョロする者もいれば、眼の前の山々に猥雑な名前を附けながら活弁マガイの潰れ声で説明するヒョーキン者もいる。中には芸者ふなばたを舷へ押し付けてキヤアキヤア云わしている者もいた。

その鼻の先の海面へ、友吉おやじの禿はげ頭あたまが、忤こに艫ともろ檣を押させながら、悠々と廻わつて来た。見ると赤ん坊の頭ぐらいの爆弾と、火を点つけた巻線香を両手に持つて、船橋に立つている吾輩の顔を見見見、何かしら意味ありげにニヤニヤ笑つている。忤この方は向うむきになつていたので良くわからなかつたが、吾輩が見下しているうちに二度ばかり袖口で顔を拭いた。泣いているようにも見えたが、多分、潮飛沫しおしぶきでもかかつたんだろうと

思つて、気にも止めずにいたもんだ。

……しかし……そのせいでもあるまいが、吾輩はこの時にヤツト友吉おやじの態度を、おかしいと思ひ初めたものだ。

第一……前にも云つた通り吾輩はドンの実地作業を生れて初めて見るのだから、詳しい手順はわからなかつたが、それでも友吉おやじの持つてゐる爆弾が、嘗て実見した押収品のドンよりもズツト大きいように感じられた。……のみならず、まだ魚群も見えないのに巻線香に火を点つているのが、腑に落ちないと思つたが、しかし何しろ初めて見る仕事だからハツキリした疑いの起しようがない。これが友吉おやじ一流の遣り方かな……ぐらゐに考へて一心に看守つてゐるだけの事であつた。

一方、甲板の上では「シツカリ遣れエ」という酔つ払いの怒号や、ハンカチを振りながらキーキー声で声援する芸妓連中の声が入乱れて、トテモ煮えくり返るような景気だ。そのうちに慶北丸の惰力がダンダンと弛んで来て、小船の方が先に出かかると、友吉おやじは倅に命じて櫓を止めさせた。……と思つうちに、その舳先に仁王立ちになつた向う鉢巻の友吉おやじが、巻線香と爆弾を高々と差し上げながら、何やら饒舌り初めた。

船の中が忽ちピツタリと静かになつた。吾輩も、友吉おやじが吾輩の代りになつて講演

を初めるのかと思つて、ちよつと度肝どきもを抜かれたが、間もなく非常な興味をもつて、皆と一緒に傾聴した。

友吉おやじの塩しお辛声からは、少々上ずつていたが、よく透つた。ことに頭から日光を浴びたその顔色は頗すこぶる平然たるもので、寧むしろ勇氣凜々たるものがあつた。

「……皆さん……聞いておくんなさい。私はこの爆弾ハッパを投げて、生命いのちがけの芸当をやつつける前に、ちよつと演説の真似方を遣らしてもらいます。白状しますが私は今から十四年ほど前に、柳河かかあで嬢まわとこと、嬢の間男をブチ斬つてズラカツタ林友吉というお尋ね者です。

……それから後のち五年ばかりというものこのドン商売に紛れ込みまして、海の上を逃げまわつておりましたが、その間に警察署とか裁判所とか、津々浦々の有志とか、お金持ちとかいう人達が、吾々に生命いのちがけの仕事させながら、どんなに美味うまい汁を吸うて御座るかという証拠をピンからキリまで見てまわりました。爆弾ハッパの隠匿かくし処ところなどもアラカタ残らず、探り出してしまつたものです。

……それが恐ろしかったので御座んしょう。警察と裁判所と、有志の人達が棒組んで、この私を袋ダタキにして絶影島の裏海岸に捨てて下さつた御恩バツカリは今でも忘れておりません。そう云うたら思い当んなさる人が皆さんの中にも一人や二人は御座る筈ですが、

へへへへへへへへ……」

この笑い声を聞くと同時に、船の中で「キャ——ッ」という弱々しい叫びが起つて、一人の仲居なかいが引つくり返つた。その拍子に近まわりの者が、ちよつとザワ付いたように見えたが、又もピツタリと静かになつた。……友吉の気魄に呑まれた……とても形容しようか……。相手が恐ろしい爆弾を持つているので、蛇に魅入みいられた蛙かえるみたような心理状態に陥つていたものかも知れない。

友吉おやじの顔色は、その悲鳴と一所に、益々冷然と冴え返つて来た。

「……アンタ方は、ええ気色な人達だ。罪人を捕まえて生命いのちがけの仕事させながら、芸者を揚げて酒を飲んで、高見たかみの見物をしているなんて……お役人が聞いて呆れる。私は轟先生の御命令じゃから不承不承にここまで来るには来てみたが、モウモウ堪忍袋の緒が切れた。持つて生れたカンシヤク玉が承知せん。

……アンタ方は日本の役人の面つらよごしだ。……ええかね。……これはアンタ方に絞られたドン仲間の恩返しだよ。コイツを喰らつてクタバツてしまえ……」

と云ううちに爆弾の導火線を悠々と巻線香にクツ付けて、タツタ一吹きフツと吹くとシューシューという奴を片手に、

「へへへへ……」

と笑いながら船首の吃水線きつすいせん下に投げ付けた。……トタンに轟然たる振動と、芸者連中の悲鳴が耳も潰れるほど空気を劈つんざいた。それを見上げた友吉おやじは又も、

「へへへへへへ……」

と笑いながら、今一つの爆弾を揚板あげいたの下から取出して導火線に火を点つけた。それを頭の上に差し上げて、

「……コレ外道サレツ……」

と大喝しながら投げ出したと思つたが、その時遅く彼かの時早く、シューシューと火を噴ふく黒い爆弾たまがおやじの手から三尺ばかりも離れたと見るうちに、眼も眩くらむような黄色い閃光がサツと流れた。同時に灰色の煙がムツクリと小舟の全体を引つ包んだ中から、友吉おやじの手か、足か、顔か、それとも舷ふなべりか、板子か、何だかわからない黒いものが八方に飛び散つてポチャンポチャンと海へ落ちた。そうしてその煙が消え失せた時には、半分水みずぶ船ねになった血まみれの小舟が、肉片のへバリ付いた艫櫓とせろを引きずつたまま、のた打ちまわる波紋の中に漂つていた。

不思議な事に吾輩は、その間じゆう何をしていたか全く記憶していない。危険いとも、恐ろしいとも何とも感じないまま船橋フリッジの上から見下ろしていたものだ。恐らく側に立っていた船長も同様であつたろうと思う。……友吉おやじの演説をハッキリと聞いて、二つの爆弾が炸裂するのを眼の前に見ていながら、一種の催眠術にかかったような気持ちで、両手をポケットに突込んだなりに、棒のように硬直していたように思う。ただ、その石のように握り締めた両手の拳こぶしの間から、生温なまぬい汗がタラタラと迸ほとばしり流れるのをハッキリと意識していたものだが、「手に汗を握る」という形容はアンナ状態を指したものかも知れん。

船の甲板デッキは、むろん一瞬間に修羅場しゅらじょうと化していた。今の今まで、抱き合つたり、吸付き合つたりしていた男や女が、先を争つて舷側に馳け付けた。そこへ誰だかわからないが非常汽笛を鳴らした者がいたので一層騒さわぎが深刻化してしまった。

船体はいつの間にか十度ばかり左舷に傾いて、まだまだ傾きそうな動揺を見せていたが、そのために酔つた連中の足元がイヨイヨ定まらなくなつたらしい。折重なつて迂すべり倒れる。その上から狼藉ろうぜきしていた杯盤ばいばんがガラガラガラと雪崩なだれかかる。その中を押し合い、ヘシ合あい、突飛ばし合いながら両舷のボートに乗移ろうとする。上から上から這いかかり乗りか

かる。怪我をする。血を流す。嘔吐く。気絶する。その上から踏み躪る。警官も役人も有志も芸妓も有つたもんじやない。皆血相の変つた引歪んだ顔ばかりで、醜態、狼狽、叫喚、大叫喚の活地獄だ。その上から非常汽笛が真白く、モノスゴク、途切れ途切れに鳴り響くのだ。

左右の舷側に吊した四隻のカッター端舟はセイゼイ廿人も乗れる位のもので在つたろうか。一艘毎に素早い船員が飛乗つて、声を暖らして制止しているが耳に入れる者なんか一人も居ない。我勝ちに飛乗る、縋り付く、オールを振廻すという状態で、あぶなくて操作が出来ない。そのうちに左舷の船尾から猛烈な悲鳴が湧き起つたから、振り返つてみると、今しも人間を山盛りにして降りかけた端舟が、操作を誤つて片つ方の吊綱だけ弛めたために、逆釣りになつてブラ下がった。同時に満載していた人間がドブンドボンと海へ落ちてしまつたのだ。海の深さはそこいらで十五六尋も在つたろうか……。

それを見た瞬間に吾輩はヤツト我に返つた……これは俺の責任……といったような感じにヒドク打たれたように思う。

傍を見ると船長が吾輩と同じ恰好でボンヤリと突立っている。肩をたたいて見たが、啞然として吾輩を振り返るばかりだ。船橋の下の光景に気を吞まれていたんだらう。

吾輩はその横で背広服を脱いで、メリヤスの襯衣シヤツとズボン下だけになった。メリヤスを一枚着ていると大抵な冷めたい海でも凌しのげる事を体験していたからね。それから船橋ブリッジの前にブラ下げて在った浮袋フイを一個引ひつ抱とえて上甲板へ馳はり降りた。船尾から落ちた連中を救たすけて水舟に取付かせてやるつもりだった。それからボートの前の連中を整理して狼狽たすさせないようになしようと思ひ思ひモウ一つ下甲板へ馳はり降りると、その階段の昇り口の暗い処でバツタリとこの船の運転士に行き会つた。よく吾輩の処へ議論を吹っかけに来る江戸ツ子の若造わかぞうで、友吉とも心安い、来島くるしまという柔道家だったが、これも猿股一つになつて、真黒な腕に浮袋を抱え込んでいた。

「……あつ……轟先生。ちようどいい。一いっしょ所に来て下さい」

と云ううちに吾輩を引っぱつて、客室の横の階段から廊下伝いに混雑を避けながら、誰も居ない船首へ出た。その時に非常汽笛がバツタリと鳴り止んだので、急に淋なみだしく、モノスゴクなつたような気がしたが、そこで改めて来島の顔を見ると、眼に涙なみだを一パイ溜ため、青い顔をしている。友太郎の事を考えているのだらうと思つたが、しかし二人とも口には出さなかつた。来島は落付いて云つた。

「……轟先生……損害は軽いんです。汽笛ふえなんか鳴らしたから不可いけなかつたんです。……



傾かしいだ原因はまだ判わか然りませんが、船底の銅版あかと、木板いたの境目二尺に五尺ばかりグザグザに遣られただけなんです。都合よく反対に傾かしいだお蔭で、モウ水面に出かかっているんですから、外から仕事をした方が早いと思うんです。濟みませんが先生、この道具袋フクロを持って飛込んでくれませんか。水夫も火夫もみんなポンプに掛り切っていて手が足りないんですから……浮袋フイを離してはいけませんよ。仕事が出来ませんから……いいですか……」

吾輩は一も二もなくこの若造の命令に従つて海に飛込んだ。イザとなると覚悟のいい奴には敵かなわないね。

ところが、それから引続いた来島の働らき振りには吾輩イヨイヨ舌を捲かされたもんだよ。溺れている人間なんか見向きもしない。一生懸命で、上からブラ下げた綱すがに縋りながら、船の横つ腹に取付いて、穴の周囲にポンポンと釘を打ち並べると、八番ぐらいの銅線を縦横じゆうおうむじん十文字に引っかけまわした。その上から帆キャンバス布を当てがって、片つ方から順々に大釘で止めて行く……最後に残つた一尺四方ばかりの穴から猛烈に走り込む水を、針金に押し当てがった帆キャンバス布で巧みにアシライながら遮り止めてしまった。その上からモウ二枚帆キャンバス布を当てがって、周囲まわりをピッシリ釘付けにして、その上からモウ一つ、流

れていたオール櫂を三本並べながら、かすがい鏝釘で頑丈にタタキ付けてしまった。どこで研究したも  
のか知らないが、百人ばかりの生命いのちの親様だ。思わず頭が下がったよ。

その吾々が仕事をしている二三間げん向うには、端舟ボートの釣つり綱つなが二本、中途から引つ切れた  
ままブラ下がついていた。切れ落ちたボートは人間を満載したまま一度デングリ返しを打つ  
た奴が、十間ばかり離れた処に漂流していたが、その周囲には人間の手が、ほしだいこん干大根を並  
べたようにビツシリと取付いている。……にも拘わらず、その尻の切れた二本の綱には、  
上から上から取付いてブラ下がつて来る人間が、重なり重なり繋がりが合っているのだ。芸  
者、紳士、警官、お酌、判事、検事、等々々といった順序に重なり合った珍妙極まる人間  
の数珠じゆずだま玉なんだ。しかもその一つ一つが「助けてくれ助けてくれ」と五色ごしきの悲鳴をあげ  
ているのだから、平生なら抱腹絶倒の奇観なんだが、この時はドウシテ……その一人一人  
が絶体絶命の真剣なんだから遣り切れない。巡査の握り拳こぶしの上に芸者のお尻おしりがノシかかっ  
て来る。仲居なかいの股倉またが有志の肩に馬乗りになる。「降りちゃ不可いかん降りちゃ不可いかん」と下  
から怒鳴っているんだから堪たまらない。ズルリズルリと下がつて来るうちに、見る見る綱が  
詰まって来てポチャンポチャンと海へ陥おち込む。そのまま、

「…………アアツ…………ああツ…………」

と藻掻き狂いながらブクブクと沈んで行く。その表情のムゴタラシサ……それを上から見い見いブラ下がっている連中の悲鳴のモノスゴサといったらなかつたよ。

そんな光景を見殺しにしながら仕事をしていた吾輩は、仕事が済むとモウ矢も楯もたまらない。道具袋を海にタタツ込んで、抜手を切つて沖合いの小舟に泳ぎ付いた。血だらけの櫓柄を洗つて、臍に引っかけると水舟のまま漕ぎ戻して、そこいらのブクブク連中をアラカタ舷の周囲に取付かせてしまったので、とりあえずホツとしたもんだ。

その間に来島は本船に上つて、帆布で塞いだ穴の内側から、本式にピッタリと板を打付けた。一層馬力をかけて水を汲み出す一方に、在らん限りの品物を海に投込む。ボートの連中を艙口から収容すると、今度は船員が漕ぎながら人間を拾い集める。綱を持った水夫を飛込ましてブカブカ遣つている連中を拾い集める。上つて来た奴は片端から二等室に担ぎ込んで水を吐かせる。摩擦する。人工呼吸を施すなどして、ヤツトの事で取止めた頭数を勘定してみると、警官、役人、有志、人夫を合わせて、七名の人間が死んでいる。そのほかに芸妓二名の行方がわからない……という事が判明した。これは男連中が腕力に任せて先を争つた結果で、同時に女を見殺しにした事実を雄弁に物語っているのだ。お酌や仲居が一人も飛込まないで助かつたのは、お客や姉さん等に対して遠慮勝ちな彼等の

平生の癖が、コンナ場合にも出たんじやないかと思うがね。イヤ。冗談じやないんだ。危急の場合に限って平生の習慣が一番よく出るもんだからね。

ところがその中に西寄りの北風が吹き初めて、急に寒くなつたせいでもあつたらうか。死骸を並べた二等室の広間に青い顔をして固まり合つていた、生き残りの連中が騒ぎ初めた。当てもないのに立ち上りながら異口同音に、

「……帰ろう帰ろう。風邪を引きそうだ……」

「船長を呼べ船長を呼べ……」

とワメキ出したのには呆れ返つたよ。いくら現金でもアンマリ露骨過ぎる話だからね。片隅で屍体の世話を焼いていた丸裸の来島運転士も、これを聞くと顔色を変えて立上つたもんだ。あらん限りの醜態を見せ付けられてジリジリしていたんだからね。

「……何ですって……帰るんですって……いけませんいけません。まだ仕事があるんです」  
「……ナンダ……何だ貴様は……水夫か……」

「この船の運転士です。……船の修繕はもうスツカリ出来上つていますから、済みませんがモウ暫く落付いていて下さい。これから屍体の捜索にかかろうというところですからね」

「……探してわかるのか……」

「……わからなくなつて仕方がありません。行方不明の屍体を打つちやらかして、日の暮れないうちに帰つたら、貴方がたの責任問題になるんじゃないですか。……モウ一度探しに来るつたつて、この広ツパじや見当が付きませんよ」

と詰め寄つたが、裁判所や、警察連中は、何を憤つているのか、白い眼をして吾輩と来島の顔を見比べているばかりであつた。すると又その中に大勢の背後の方で、

「……アア寒い寒い……」

と大きな声を出しながら、四合瓶ごうびんの喇叭ラッパを吹いていた一人が、ヒョロヒョロと前に出て来た。トロンとした眼を据えて、

「……何だ何だ。わからないのは芸妓げいしやだけじゃないか。芸妓なんぞドウでもいい……」

とウツカリ口を迂らしたから堪たまらない。隅ツ子の方に固おまつていた雛妓おしやくが「ワツ」と泣き出す……トタンに来島の血相が又も一変して真青になつた。

「……何ですか貴方は……芸妓げいしやなんぞドウでもいいたあ何です」

「……バカア……好色漢すけべえ……そんな事を云うたて雛妓おしやくは惚れんぞ……」

「……惚れようが惚れまいがこつちの勝手だ。フザケやがって……芸妓げいしやだつて同等の人

間じやねえか。好色漢すけべえがドウしたんだ……手前等てめえあ役人の癖に……」

と云いさしたので吾輩は……ハツ……としたが間に合わなかった。二三人の警官と有志らしい男が一人か二人、素早く立上つて来島と睨み合った。しかし来島は眉一つ動かさなかつた。心持ち笑い顔を冴え返らしたただけであつた。

「……何だ……貴様は社会主義者か……」

「……箆べらぼう棒ぼうめえ人道主義者だ……このまんま帰れあ死体遺棄罪じやあねえか。不人情もいい加減にするがいい……手前等てめえあタツタ今までその芸妓げいしやを……」

「黙れ黙れツ。貴様等の知つた事じやない。吾々が命令するのだ。帰れと云つたら帰れツ……」

「……ヘン……帰らないよ。海員の義務つて奴が在るんだ。芸妓げいしやだろうが何だろうが……」

「……馬鹿ツ……反抗するカツ……」

と云ううちに前に居た癩癩ら持ぢらしい警官が、来島の横ツ面つらを一つ、平手でピシヤリとハタキ付けた。トタンに來島が猛然として飛かかろうとしたから、吾輩が逸いち早く遮さへぎり止めて力一パイ睨み付けて鎮しずまらした。來島は柔道三段の腕前うでまへだったからね。打棄うちちやつてお

くと警官の一人や二人絞め倒おしかねないんだ。

そのうちに来島は、吾輩の顔を見てヒョッコリと頭を一つ下げた。そのまま火の出るような眼付きで一同を見まわしていたが、突然にクルリと身をひるがえ翻すと、入口の扉をドアパタンと閉めて飛び出して行った。吾輩もそのアトから、何の意味もなしに飛出して行ったが、来島の影はどこにも見えない。船橋ブリッジに上つて見ると船はもう轟々と唸りながら半回転しかけていた。

その一面に白波を嘯み出した曇り空の海上の一点を凝視しているうちに吾輩は、裸体はだかのまんま石のように固くなつてしまつたよ。吾輩の足下に大波瀾を捲き起して消え失せた友吉親子と、無情つれなく見棄てられた二人の芸妓げいしやの事を思うと、何ともいえない悽愴たる涙が、滂沱ぼうたとして止まるとどるところを知らなかつたのだ。……

……ドウダイ……これが吾輩の首無し事件の真相だ。君等の耳には最もつ、トツクの昔に這入っている事と思つていたんだが……秘密にすべく余りに事件が大き過ぎるからね。

ウンウンその通りその通り。朝鮮の内部で喰い止めて内地へ伝わらないように必死的の

運動をしたものに相違ないね。司法官連中にも弱い尻が在るからな。旅費日当を貰つて聴きに来た講演をサボつて、芸者を揚げて舟遊山ふなゆきさんをした……その酒の肴に前科者を雇つて、生命いのちがけの不正漁業を実演させたとなつたら事が穏やかでないからな。

十二、吾輩に対する嫌疑かい。

それあ無論かかつたとも。……かかつたにも何にも、お話にならないヒドイ嫌疑だ。人間の運命が傾き初めると意外な事ばかり続くものらしいね。

その翌あぐる朝の事だ。善後の処置について御相談したい事があるからというので、釜山府ふ尹官舎いんの応接間に呼び付けられてみると、どうだい。昨日きのうの事件は吾輩と、友吉おやじと、慶北丸の運転士来島とが腹を合わせた何かの威嚇手段じやないか。その背後には在鮮五万の漁民の社会主義的、思想運動の力が動いているのじやないかというので、根掘り葉掘り訊問されたもんだ。どこから考え付いたものか解からんが馬鹿馬鹿し過ぎて返事も出来ない。よつほど面喰つて、血迷つていたんだね。……しかもその入れ代り立代り訊問する連中の中心に立つた人間というのが誰でもない。昨日きのう、イの一番に芸妓げいしやを突飛ばして船尾のボートに嘔かじり付いた釜山の署長と予審判事と検事の三人組と来ているんだ。或は一種の責任問題から、この三人が先鋒に立たされたものかも知れないがね。……その背後には



慶北、全南あたりの司法官が五六名、容易ならぬ眼色を光らしている。表面は事件の善後策に関する相談と称しながら、事実は純然たる秘密訊問に相違なかったのだ。

吾輩は勿論、癪しやくさわに障さわつたから、都合のいい返事を一つもしてやらなかった。当り前なら法律と算盤そろばんの前には頭を下げる事にきめている吾輩だったが、あの時には、前の日に死んだ友吉おやじのヒネクレ根性が、爆薬の臭気においとゴツチャになって、吾輩の鼻の穴から臟腑しへ染み渡つていたらしいね。

「吾輩の講演を忌避して、船遊山ふなゆきさんを思い立ったのは誰でしたっけね」と空つトボケてやったもんだ。

すると誰だか知らない検事か判事みたような男が背後うしろの方から、

「それでも友吉親子を推薦したのは貴下あなたではなかったか」

と突込んで来たから、わざとその男の顔を見い見い冷笑してやった。

「……ハハハ……その事ならアンマリ突込まれん方が良くはないですか。実は昨晚、弁護士に調べさせてみますと、友吉の前科はズツト以前に時効にかかっていたものだそうです。私は法律を知らないのですが……それでなくとも拘留中の現行犯人を引出して、犯罪の実演をさせるよりは無難だろうと思つて、実は、あの男を推薦した次第でしたが……それで

も貴方がたの法律眼から御覧になると、現行犯を使った方が合理的な意味になりますかな

……」

と乙おつに絡んで捻ねじ返してくれた。吾れながら感心するくらい頭がヒネクレて来たもんだからね……ところが流石さすがは商売柄だ。これ位の逆襲には凹へこまなかった。

「そんな事を議論しているのじゃない。友吉おやじに、あんな乱暴を働らかした責任は当然ソツチに在る筈だ。その責任を問うているのだ」

と吾輩の一番痛いところを刺して来た。その時には吾輩、思わずカツとなりかけたもんだ……が、しかしここが大事なところと思つたから、わざと平気な顔で空を嘯うそぶいて見せた。

「……成る程……その責任なら当方で十分十二分に負いましょうよ。……しかし爆弾を投げさせた心理的の動機はこの限りに非あらずだから、そのつもりでおってもらいたいですな。無辜むこの人間に生命いのちがけの不正を働らかせながら、芸げい妓いしやを揚げて高見たかみの見物をしようとした諸君の方が悪いにきまつているのだから……諸君は友吉おやじの最後の演説を記憶しておられるだろう……」

と云つて満座の顔を一つ一つに見廻わしたら、一名残らず眼を白黒させていたよ。

「……しかし……あれは元来……有志連中が計画したもので……」

と隅の方から苦しそうな弁解をした者がいたので、吾輩は思わず噴飯ふんぼんさせられた。

「……アハハ。そうでしたか。ちつとも知りませんでした。……しかし拙者が拝見したところでは、有志の連中には余り酔った者はいなかったようである。実際に泥酔して乱痴氣らんちぎ騒ぎを演じたのは諸君ばかりのように見受けたが、違っていたか知らん。序ついでにお尋ねするが一体、諸君は講演の第二日の報告を、何と書かれるつもりですか。参考のために承っておきたい。まさか公会堂で演説中に爆弾が破裂したとも書けまいし……困った問題ですなあ……これは……」

と冷やかしてやった。ところがコイツが一等コタエたらしいね。イキナリ、

「……ケ……怪けしからん……」

と来たもんだ。眼先の見えない唐変木とうへんぼくもあつたもんだね。

「……そ……そんな事に就いては職務上、君等の干渉を受ける必要はない。君はただ訊問に答えておればいいのだ」

と頭さつきごなしに引つ被かぶせて来た。……ところが又、こいつを聞くと同時に、最前さいぜんから捻じれるだけ捻じれていた吾輩の神経がモウ一ひと捻じりキリキリ決着のところまで捻じ上ってしまったから止むを得ない。モウこれまでだ。談判破裂だ……と思うと、フロツクの腕を

捲くつて坐り直したもんだ。

「……ハハア……これは訊問ですか。面白い……訊問なら訊問で結構ですから、一つ正式の召喚状を出してもらいましょかね。その上で……如何にも吾輩が最初から計画してやった仕事に相違ない……という事にして、洗い泄やい泥水を吐き出しましょかね。要するに諸君の首が繋がりさえすれあ、ほかに文句はないでしょう……」

と喰らわしてやったら、連中の顔色が一度にサツと変つたよ。

「……エヘン……吾輩は多分、終身懲役か死刑になるでしょう。君等のお誂あつらえ向きに饒舌しゃべればね……ウツカリすると社会主義者の汚名を着せられるかも知れないが、ソレも面白いだろう。日本民族の腸はらわたが……特に朝鮮官吏の植民地根性が、ここまで腐り抜いている以上、吾輩がタツタ一人で、いくらジタバタしたつて爆弾漁業の勦滅そうめつは……」

「……黙り給えツ……司直に対して僭越けんえつだぞ……」

「何が僭越だ。令状を執行されない以上、官等かんとうは君等の上席じやないか……」

と開き直つてくれたが、その時に横合よこあいから釜山署長が、慌てて割込んで来た。

「……そ……それじゃ丸で喧嘩だ。まあまあ……」

「……喧嘩でもいいじゃないか。こつちから売つたおぼえはないが、ドウセ友吉おやじの

鬱憤晴らしだ」

「……………そんな事を云つたらアンタの不利になる……………」

「……………不利は最初から覚悟の前だ。出る処へ出た方がメチャメチャになって宜い……………」

「……………だからその善後策を……………」

「何が善後策だ。吾輩の善後策はタツタ一つ……………漁民五十万の死活問題あるのみだ。お互いの首の五十や六十、惜しい事はチツトモない。真相を発表するのは吾輩の自由だからね」

「そ……………それでは困る。御趣旨は重々わかつているからそこをどっちにも傷の附かんように、胸襟きょうきんを開いて懇談を……………」

「それが既に間違つているじゃないか。死んだ人間はまだ沖に放りつ放しばなになっているの  
に何が善後策だ。その弔慰の方法も講じないまま自分達の尻ぬぐいに取りかかるザマは何  
だ。況いわんや自分達の失態を蔽おほうために、孤立無援の吾輩をコケ威おどしにかけて、何とか辻つじつ  
棲まを合わせようとする醜態はどうだ」

「…………………………」

「ソツチがそんな了りようけん簡ならこつちにも覚悟がある。……………憚りながら全鮮五十万の漁民  
を植え付けて来た三十年間には、何遍、血の雨を潜ったかわからない吾輩だ。骨が舍利しゃりに

なるともこの真相を発表せずには措かないから……」

「……イヤ。その御精神は重々、相わかつております。誤解されては困ります。爆弾漁業の取締りに就いて今後共に一層の注意を払う覚悟でおりますが、しかし、それはそれとしてとりあえず今度の事件だけに就いての善後策を、今日、この席上で……」

とか何とか云いながら上席らしい胡麻塩頭の一人が改まって頭を下げ初めた。それに連れて二三人頭を下げたようであつたが、内心ヨツポド屁古垂れたらしいね。しかし吾輩はモウ欺されなかつた。

「……待つて下さい。その交換条件ならこつちから御免を蒙りましょう。陛下の赤子、五十万の生霊を救う爆弾漁業の取締りは、誰でも無条件で遣らなければならぬ神聖な事業ですからね。今後、絶対に君等のお世話を受けたくない考えでいるのです。……ですから君等の職権で、勝手な報告を作つて出されたらいいでしょう。……吾輩は忙がしいからこれで失礼する」

「……まあまあ……そう急ぎ込まずと……」

「いいや失敬する。安閑と君等の尻拭いを研究している隙はない。……何よりも気の毒なのは死んだ二人の芸者だ。林友吉や、お互いの災難は一種の自業自得に過ぎないが、芸

妓やとなるとそうは行かん。何も知らないのに巻添えを喰わされたばかりじゃない。面倒臭いといつて沖に放り出されて鯖の餌食にされたんだから、気の毒も可愛想も通り越している。君等には関係のない事かも知れんが、これから行つて大いに吊問してやらなくちゃならん。……もつとも今更、線香を附けてやったつて成じょうぶつ 仏 出来まいとは思ふがね。ハツハツハツハツハツ……」

といつた調子で、今まで溜まつていた毒氣を一度に吹っかけながら退場してくれた。……ハハハハ。イヤ。痛快だったよ。何の事はない役人連中、蚊かを突つついて藪やぶを出した形になつた。おまけにアトから聞いてみると、当日来なかつた連中の中の十人ばかりが風邪を引いて、宿屋に寝ていたというのだから吾輩イヨイヨ溜飲を下げたもんだよ。

とはいうものの……白状するが吾輩は、そのアトから直ぐに有志連中が調停に来るものと思つて、実は手具脛てぐすねを引いて待つていたもんだ。……来やがたらドウセ破れカブレの刷毛序はけついででだ。思い切り向う脛すねを搔かつてくれようと思つて、一週間ばかり心待ちに待つていたがトウトウ来ない。可怪おかしいと思つて様子を探つてみると、これも慌あわてて海に飛び込んだ頭株うぢの四五人が、ヒドイ風邪を引いて寝てしまった。しかも、その中の一人は急性肺炎……モウ一人は心臓麻痺でポックリ死んでしまったので、それやこそ……死んだ友吉

の祟りだ。友吉風ともきちかぜ友吉風というので何ともない奴までオゾ毛を慄ふるつて蒲団ふとんを引つ冠かぶつて  
いるという……実に滑稽なお話だが、とにかくソレくらい恐ろしかったんだね。友吉たる  
もの以もつて瞑めいすべしだろう。……もつとも一方から考えてみると有志連中は懲役に行つても  
職しよばい業いを首にされる心配はない。だから役人連中に泣き付かれない限り調停に立つ必要  
もない。又、泣き付かれたにしたところが、二度と吾輩を丸め込む見込みはない……とい  
うないないの三拍子が揃っているんだから、知らん顔をして寝ていたんだろう。……但新ただし  
聞社には遺憾なく手を廻わしたものと見えて、一行も書かなかつた。だから結局、死んだ  
奴が死に損という事になつた訳だ。

不人情なものさね。

しかし真剣なところが「友吉風邪」ぐらいの事で癒える吾輩の腹ではなかつた。

芸者や友吉は成仏しても、吾輩が成仏出来ない。吾輩が観念しても五十万人の怨みを如い  
何かんせんだ。……ドウするか見ろ……というので事件の翌あぐ日から毎日事務所に立て籠もつ  
て向う鉢巻でこの報告書を書き初めたもんだが、サテ取りかかつてみるとナカナカ容易で  
ない。演説の方なら十時間でも一気呵成かせいだが、文章となると考えばかりが先走つて困るん  
だ。おまけに唯一の参考書類兼活字引いきしびきともいふべき友吉おやじが居ないんだからね。ヤ



タラに興奮するばかりで紙数がチツトも捗はかどらない。

その間に有志連中の方では如才なく事を運んだらしい。吾輩との妥協を絶望と見て取つて暗々裡あんあんりに事件を揉み消すと同時に、同じような手段でもって総督府の誰かを動かしたものと見える。吾輩の本官を首にした上に、各道で好意的に手続きをしていた組合費の徴収をピツタリと停止してしまった。実に陰険、悪辣あくらつな報復手段だ。山内さんが生きて御座ござつたらコンナ事にはならないんだがね。せめてもの便りになる、藁塚産業部長までも中風で、郷里の青森県に寝て御座ござるんだから吾輩、陸に上つた河童かっぱも同然だった。もつとも恩給を停止されなかつたのが、せめてもの拾い物だったかも知れないが……ハツハツ……。

そこで吾輩は断然思い切つてこの絶影まぎのしま島の一角にこの一軒屋を建てて自炊生活を初めた。妻子を持たない吾輩にとつては格別の苦勞じゃないからね。ここで本腰を入れて報告を書く決心をしたもんだが、書けば書くほど、朝鮮官吏の植民地根性が癩しかに障さわつて来る。同時にこの素晴らしい爆薬の取次網を蔽おほうべく、内地、朝鮮の有力者連中が、如何に非国家的な黒幕を張り廻わしているかが、アリアリと吾輩の眼底に映じて来た。友吉おやじの云い遺のこした言葉が、マザマザと耳に響いて来て、ペンを持つ手がブルブルと震え出すよう

になつた。……そうだよ。或は酒精中毒から来た一種の神経衰弱かも知れないがね。しま  
いにはボンヤリしてしまつて、ワケのワカラナイ泪ばかりがボロボロ落ちて来るんだ。コ  
ンナ事ではいけないと思つて、焦せれば焦せるほど筆がいう事を聞かなくなるんだ。呑兵  
衛老 医も心配して、

「そいつは立派な動脈硬化じや。萎縮腎も一所に来ていようじや。漢法に書瘧とい  
う奴があるがアンタのは酒瘧じやろう。今に杯が持たれぬようになるよ。ハハハハ。とに  
かく暫く書くのを止めた方が宜え。そうなるとイヨイヨ気が急くのが病氣の特徴じやが、  
そこで無理をしよると脳髓の血管がパンクする虞れがある。そうなつたら万事休すじや。  
拙者もアンマリ飲みに来んようにしよう」

といったアンバイで、氣の毒そうに威かしやがるんだ。

そこで吾輩も殆んど筆を投ぜざるを得なくなつた。刀折れ、矢竭きた形だね。

……蒼天蒼天……吾輩の一生もこのまんま泣き寝入りになるのか。回天の事業、独力を  
奈何せん……と人知れず哀号を唱えているところへ又、天なる哉、命なる哉と来た。……  
……彼の林青年……友吉の悴の友太郎が今年の盂蘭盆の十二日の晩に、ヒョッコリと帰つて  
来たのには胆を潰したよ。

ちようどその十二日の正午過ぎの事だった。友吉の好物だった虎鰻とらふぐを、絶壁がけの下から投上げてくれた漁師やっつがあつたからね。今の吞兵衛老ドクトル 医と、非番だった慶北丸の来島運転士を、その漁師に言ことづけ伝て呼寄せると、この縁側で月を相手に一杯やりながら、心ばかりの弔意を表しているところだった。何とかカンとか云っているうちに吞兵衛ドクトルもずるずるべつたりに座り込んだ訳だ。

むろん話といつたら外にない。友吉おやじで持ち切りだ。

「結局、友吉おやじは諦めるとしても、あの悴の友太郎だけは惜しかったですね」と来島が暗涙を浮かめて云った。

「……ウン。吾輩も諦らめ切れん。あの時に櫓柄へへバリ付いていた肉の一片ひときれをウツカリ洗い落してしまったが、あれは多分、友太郎のだったかも知れない。今思い出しても涙が出るよ」

吞兵衛ドクトルも眼を赤くして関羽鬚かんうひげをしごいた。

「……ハハア……それは惜しい事じゃったなあ。あの子供の親孝心には拙者も泣かされたものじゃったが……その肉を拙者がアルコール漬にして保存しておきたかったナ。広瀬中佐の肉のアルコール漬がどこぞに保存して在るとい話じゃが……ちようど忠孝の対照に

なるからのう……」

「飛とんでもない。役人に見せたら忠と不忠の対照でさあ。僕を社会主義者と間違える位ですからね……ハハハハ……」

「ウン……間違えたと云やあ思い出すが、吾輩に一つ面めんもく目ない話があるんだ。あんまり面目ないから今まで誰にも話さずにいたんだが……ホラ……吾輩と君とで慶北丸の横よこ腹はらを修繕してしまうと、君は直ぐに綱にブラ下つてデツキに引返したろう。吾輩は沖の水舟を拾うべく、拔手を切つて泳ぎ出した……あの時の話なんだ。実際、この五十余年間にあの時ぐらい、ミジメな心理状態に陥つた事はなかったよ」

「……へエ。溺れかかったんですか」

「……馬鹿な……溺れかかった位なら、まだ立派な話だがね……」

「……へエツ。どうしたんですか……」

「……その小舟に泳ぎ付く途中で、何だか判わか然からないものが水の中から、イキナリ吾輩の左足にカジリ付いたんだ。ピリピリと痛いくらいにね」

「……へエ。何ですかそれは……」

「何だかサツパリわからなかったが、ちょうどアノ辺ふかに鱻かの寄る時候だったからね。ここ

へ来たたら大変だぞ……と泳ぎながら考えている矢先だったもんだから仰天したよ。咄嗟とつせの間にソレだと思つて狼狽ろうたいしたらしい。ガブリと潮水を吞まされながら、死に物狂けはないに蹴放けはなして、無我夢中で舟に這い上ると、ヤツト落付いてホツとしたもんだが……」

「……結局……何でしたか……それあ……」

「……ウン。それから釜山の事務所に歸つて、銭湯せんとうに飛込むと、何か知らピリピリと足に泌しみみるようだから、おかしいなと思ひ、上あがり 櫃かまの燈火あかりの下に来てよく見ると……

どうだ。その左の足首の処に女の髪が二三本、喰い込むようにシツカリと巻き付いて、シクリシクリと痛んでいるじゃないか……しかも、そいつを掴つまみ取ろうとしても、肉に喰い込んでいてナカナカ取れない。……吾輩、思わずゾツとして胸がドキンドキンとしたもんだよ。多分、水面下でお陀仏だぶつになりかけていた芸者の髪かみの毛けだったろうと思ふんだが、今思い出しても妙な氣持になる。……女という奴は元来、吾輩の苦手なんだがね。ハハハハ……」

といったような懐旧談で、頻しきりに悽愴すじがつてシンミリしている鼻の先へ、庭先の月見草の中から、白い朝鮮服を着て、長い煙管きせるを持った奴がノツソリと現われて来たもんだ。

三人はその時にハツとさせられたようだった。しかし、そのうちに長い煙管が眼に付く

と、

……ナアンダ朝鮮公か……コンナ処まで浮かれて来るなんて呑気な奴も在るもんだ。アツチへ行け。何も無い何も無い。

というので手を振って見せたが動かない。そのうちに気が付いて見るとそれが擬いもない友太郎だったのにはギョツとさせられたよ。噂をすれば影どころじゃない。テツキリ幽霊……と思つたらしい。三人が三人とも坐り直したもんだ。

……ハハハ……ナアニ。聞いて見たら不思議でも何でもないんだ。

何よりも先に××沖で例の一件を遣付けた時の話だが……慶北丸に引かれた小船で、沖へ揺られて行く途中で早くも親父の顔を見て取つた友太郎がハツとしたものだそうだ。そこでもしやと思つて親父の凶星を刺してみると果して「その通りだ。モウ勘弁ならん」と冷笑している。……これはいけない。こうなつたら取返しの附かない親父だと思つたが、何ぼ何でも吾輩の一身が案じられたもんだから一生懸命に親父の無鉄砲を諫めにかかつたが……モウ駄目だった。

「……ナアニ。心配するな。轟先生の泳ぎは神伝流の免許取りだから一所に沈む気遣いはない。アトで拾い上げて大急ぎで釜山に帰るんだ。そのうちに先生を説伏せて組合の巡

邏船、鶏林丸に食糧と油を積んで、その夜の中にズラカッてしまう。真直に露領沿海州へ抜けて俺の知っている海岸で冬籠りの準備をする。春になったら砂金採りだ。誰も寄り付けない絶壁の滝壺の中にパイ溜まっているのを、お前と二人で見た事が在るだろう。……あすこへ行くんだ……あの瀑布の上の方を爆薬でブチ壊して閉塞いでしまえばモウこつちのもんだ。儲かるぜそれあ……轟先生は元来、正直過ぎるからイカン。役人の居る処はドウセイ性に合わん事を御存じないんだ。あんな人を一生貧乏さしといては相済まん。……朝鮮はモウ嫌じゃ嫌じゃ。西比利亜が取れたら沿海州へ行くと口癖に云うて御座ったから、コレ位、宜え機会は無い。モウ西比利亜には日本軍がワンワン這入つとるから喜んで御座るにきまつとる……それでも嫌なら今の中に貴様もデツキに上つとれ。……俺が一人で遣つ付けてくれる。轟先生の演説ぐらいで正気附く野郎等じゃない……」

という見幕だったのでトテも齒の立てようがなかった。しかし、それでも折角の先生の苦心がこれで打切りになるのか……親父の一代もコレ切りになるのか……といったような事を色々考えているうちに胸が一パイになつてしまった。

ところが虫が知らせたのであろう。そう思っているうちにその言葉が遺言になつてしまった。自分も一所に海へタタキ込まれてしまったが、間もなく正気に帰ってみると、水船

の舷側にへバリ付いてブカブカ遣っていることがわかった……ちようど向側<sup>むこうがわ</sup>だったから甲板<sup>デッキ</sup>の上から見えなかつたんだね。おまけにどこにも怪我<sup>けが</sup>一つしたような感じがしない。そこでコンナ処<sup>ハッチ</sup>に居ては険<sup>けん</sup>呑<sup>のん</sup>だと気が付いたから、出来るだけ深く水の底を潜って、慶北丸の左舷の艙口<sup>ハッチ</sup>から機関室に潜り込んだ。そこいらに干して在った菜<sup>な</sup>ツ葉<sup>ば</sup>服<sup>ふく</sup>を着込んで、原油<sup>オイル</sup>と粉炭<sup>ぬりつ</sup>を顔に塗<sup>ぬり</sup>付<sup>け</sup>けると知らん顔をしてポンプに掛かっていたが、混雑<sup>こんさつ</sup>のサナカだったから誰にもわからなかつた。スレ違つた来島にも気付かれないで、無事に釜山へ帰り着いた……そこで又、吾輩の処へ帰つたら物騒だと考えたから、そのままドン仲間に紛れ込んで、海上を流浪する事十箇月……その片手間に親の讐敵<sup>かたき</sup>だといふので、潜行<sup>モグリ</sup>爆薬<sup>リハツパ</sup>の抜け道を探るべく、あらん限りの冒険をこころみていたが、お蔭で字が読めるようになっていた上に、朝鮮語と、柳河語と、東京弁が自由自在に利いたので非常に便利な事が多かつた。

すると又そのうちに吾輩がタツタ一人で、淋しい絶影<sup>まきのしま</sup>島の離れ家に引込んだ話を風の便りに聞いたので、これには何か仔細<sup>わけ</sup>が在りそうだ。まだ帰るにはチツト早い<sup>ま</sup>が、ソーツと様子を見てやろうと思つて、一番お得意の朝鮮人に化けて帰って来てみると、なつかしい三人の声が聞こえて来る。それが一つ残らずあの世から聞いているような話ばかりなの



でタマラなくなつてここへ出て来ました。こうなつたら、愈々先生と死生を共にするばかりです。朝鮮人に化けていたら一所に居ても大丈夫でしょう。親父と同様に使つて下さい。ドンナ事でも致しますから親父の讐仇を討たして下さい……という涙ながらの物語りだ。どうだい。今時には珍らしい青年だろう。

この青年と、吾輩の半出来の報告書を一所にして提供したら、いい加減お役に立つだろう。この二つを拠所にして君が靈腕を揮つたらドンの絶滅期して俟つべしじゃないか。

ウンウン。彼の青年を君が引受けてくれると云うのか。ウンウン。そいつは有難い。東京の夜学校に通わしてくれる。……死んだ親父がドレ位喜ぶか知れないぜ。

この密告書はアイツの筆跡に相違ないよ。ここに來て吾輩の窮状を見ると間もなく書上げて、識合いの船頭に頼んで、呼びから投函されたものに違いないんだ。コイツが君の手にかかつて物をいふとなれば、友吉おやじイヨイヨ以て瞑すべしだ。コレ位大きな復讐はないからね。

ああ愉快だ。胸が一パイになった。アハハハ。笑わないでくれ。吾輩決して泣き上戸じゃないつもりだが……オイオイ友。友。友太郎……そこに居るか。チョット出て来い。遠

慮する事はない。来いと云うたらここへ来い。アトを閉めて……サア来た……どうだい。立派な青年だろう。今では吾輩の悴みたようなもんだ。御挨拶しろ。御挨拶を……この人が吾輩の親友……有名な齋木検事正だ。ハハハハ。驚いたか。貴様の血で書いた手紙が御役に立ったんだ。そのためにわざわざ齋木君が来てくれたんだ。貴様の親父おやじの仇敵かたきを討ちに……。

……何だ何だ。泣く奴があるか……馬鹿……いくつになるんだ。……サア。こつちへ来てお酌をしろ。笑つてお酌をしろといったら。貴様も日本男児じゃないか……アハハハ……。

齋木君……一杯受けてくれ給え……吾輩も飲むよ。……風速実に四十米突メートル……愉快だ。実に愉快だ。飲んで飲んで飲み死んでも遺憾はないよ……。

「今日こんにち、君を送るすべから、須く酔いを尽すべし……明朝、相憶あいおもうも、路みち、漫々たりイ……じゃないか、アハハハ……」





## 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「氷の涯」春秋社

1935（昭和10）年5月15日発行

※底本の「名画の屏風《じょうぶ》」を、「名画の屏風《びょうぶ》」に改めました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2003年12月13日作成

2005年5月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 爆弾太平記

夢野久作

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>